
見習い書記官ナタネの音之國記

菜種油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い書記官ナタネの音之國記

【Nコード】

N7350J

【作者名】

菜種油

【あらすじ】

広大な草原の中、ぽつりと取り残されたような深い森に抱かれた小さな国。

列強に囲まれた遊牧の民を祖とする者達の暮らしぶりを、ひよんな事から書き記すことになったひとりの城仕えの見習い書記官がいた。一般庶民として生きる彼がめがね越しに眺める、この国の風景とは。

ムーンライトノベルズにて連載中の「音之國ノ物語」（女性向け：R-18指定）の世界を、庶民からの視点で眺めた副読本としての

作品です。

本編の登場人物が時折出入りする淡々としたお話ではありますが、のんびり楽しんでいただければ幸いです。

本作品は全年齢対象です。

其ノ巻**はじまりの朝

> i 4 2 4 3 | 3 6 1 <

ドンドンドンドンドン

「兄さん、ちよつと！ いい加減に起きてよ！！ もう第一刻の鐘は、とうに鳴ったんですからね。また遅刻して怒られても知らないんだから！」

「……………ハイ」

階下から、めんどりのようにコケッコケッコと捲し立てる声が聞こえてくる。

こんな朝っぱらから、よく頭の血管が切れないものだ。と、掛け布の中でゴロリ、ゴロリと一回転分の寝返りをうち、しぶしぶ敷き布から起きあがった。

大あくびの後、小机に置いたためがねを取る。もうひとつ、小あくび。

そもそも、小あくびなんて言い方があるのかも知らないが、そこはまあ、いいとしよう。さて、そろそろ起きないと妹の機嫌を本気で損ねてしまう。

ドンドンドンドンドン

「はいはい、今、降りますよ〜」

天井からパラパラと藁屑や土粉が落ちてくるのを適当に払いながら、のそのそと階段を下りて行くと、妹が天井を睨み付け、箒の長い柄で再び天井を突き始めたところだった。

「あら珍しい。おはよう、藁屑兄さん。ちょっとやりすぎちゃったかしら？」

瞳を丸くして近寄ってきた妹は、藁屑まみれになったわたしの髪や肩についた藁屑を払い、ついでに持っていた箒を、はい。と、わたしに手渡した。

「さっき掃除したばかりなのよ。きれいに掃いてね」

妹はそう言うと、朝ごはんの支度に戻っていった。

朝一番の起き抜けにすることが、妹がわたしの部屋の真下を箒の柄で盛大に突いたおかげで、わたしが被る羽目になった、屋根の材料屑の掃き掃除。世の中、妻の尻に敷かれている夫はたくさんいても、妹の尻に敷かれる生活を送る兄は、果たしてどのくらいいるんだろうかと、床の土粉を掃きつつ思う。

「その起こし方はなかなか画期的だけれど、家が壊れやしないかい？」

「だって、今までの中でこれが一番効くんだもの。朝は忙しいんですから、兄さんの面倒ばかり見ていられないのよ。終わったら、早く顔を洗ってね」

本当に、これが同じ血を分けた兄妹なのだろうか。

何年も前に亡くなった両親は、わたしが貰うはずだった機敏さを、全て妹にやってしまったに違いない。あるいは逆に、妹が貰うはず

だったものを、わたしが全て取り尽くして生まれてしまったのか。どうもその辺りは、生前の両親にもわからず仕舞いだったようだ。

さてと、これでよし。

庭に出て、既に妹が汲んでおいてくれた井戸水に、両手を入れようとした。

「おっと………めがね、めがね」

めがねは、この豊かな国でさえ贅沢品だ。大切に使わなければ、確実に妹に殺される。なんといつても、妹が目の悪いわたしを案じて、城に上がった商人を半ば脅すようにして半値以下に値切り倒し、贈ってくれた品なのだから。

我が妹は、口は悪いが心根はとても優しい子なのだ。

ちなみにわたしは、妹に贈って貰ったためがねを掛けたまま、半日その商人の愚痴を聞く羽目になった。妹を泥棒呼ばわりし、さめざめと泣いている商人にわたしは心から同情し、なぜかふたりで慰め合った。

「兄さん？ 早くして。冷めちゃうわ」

炊場から妹の声が飛んでくる。まだ井戸水に触ってもいない事が知れたら、更に叱られるに違いない。慌てて頭の上にめがねを乗せ、顔を洗う。

布で顔を拭いながら家に入ると、焼き上がったばかりのシトが皿に山盛りになっている。椅子に座ると、妹がシトをつける煮汁をわたしの前に置いた。

ちなみに、シトとは皆さんでいうところのパンみたいなものだ。麦の粉を牛や山羊の乳で練って丸形に伸ばし、かまどの内側に貼り付けて焼く。かまどの灰をうまい具合に避けておかないと、焼けてかまどから剥がれ、落下して灰だらけになった末期のシトを食べる事になる。シトをつける煮汁は、皆さんでいうところの肉団子汁みたいなものだ。

朝一番に絞った牛の乳が入った器を置き、妹はわたしの向かいに座った。

「もう淡霞バイカに入ったんだから、もうちょっと早く起きればいいのに。朝一番の環状壁の美しさを知ったら、兄さんも毎日、早起きするようになるんじゃない？」

父さん、母さん、いただきます。

妹は瞳を閉じて挨拶をすると、シトを自分の皿に取り始めた。

「いつの季でも、眠いものは眠いんだ。そうだろう？ 妹よ」

「夜遅くまで起きているから、朝起きられないんでしょう？ このところ毎晩じゃない。いつたい、何をしているの？ お城の仕事？」

シトを指先で千切りながら、チラリとこちらを覗いた妹の視線に、わたしは思わず目をそらした。

「うん。まあ……そんなもんだよ。うん」

小姑のような我が妹も、年頃の娘なのだ。淡い夢を壊すようなことは、可愛い妹を持つ兄としても、伝えるべきではないのだろう。

「さて。じゃあ行ってくるよ」

「はい。気をつけてね。馬車に轆かれないように、子どもに踏まれないように、めがねを落とさないように。行ってらっしゃい」

「はいはい。かまどの火だけは頼んだぞ」

「あら。兄さんじゃないもの。大丈夫よ」

いつも通り、支度を整えた荷物をわたしに手渡し、背中をパンと叩くと、妹は戸口で手を振って見送ってくれた。

空は青く晴れ渡り、陽射しが燦々と白い環状壁を照らしている。第二環状区にあるわたしの家から城までは歩いていけば、ちょうど城の開門時刻に城門に辿り着く。

わたしの名は、ナタウルネ・ユチ。城仕えの書記官の見習いだ。見習いにしてはもう結構いい歳なのだが、諸般の事情により、今から二季程前から登城することになった。登城して一番最初に言われた言葉は。

「ふくん……名前聞いて、どんな可愛い女の娘かと思ったら、男デスカ。きみ、良い名前だけど呼びづらいから、ちょっと縮めなさいヨ」

「そうですね。男女の別がはっきりしておいた方が良いでしょう。では、どのようによ？」

その日、初めて会ったこの城の老師と尉官は、いきなり残念がら

れて動揺しているわたしのことなどどこ吹く風で、淡々と話を進めた。

「そうだね。じゃあ、ん〜。ナタネにしようか。いい名前でシヨ？」

「あの、折角ですが、どうもわたしにはしつくりと来ませんので、では、せめてユチとでもお呼び下されば……………」

「ユチはもう、あなたの同僚にふたりもいるのですよ。申し訳ありませんが、老師の仰せの名前で呼ぶことに致しましょう。すぐ慣れますよ」

わたしのこの城での第一の仕事は、父母から貰った大切な隠し名をあっさりと、上司とそのまた上司に変えられ、それを自分の名として同僚に紹介してまわる事だった。

万が一、この話が妹の耳に届いたら……………はあ、怖い。

其ノ式**夕暮れの訪問者

第一環状区の大門が閉じられる合図の銅鑼の音が、遠く微かに聴こえて来る。

それほど大きな音でもないのに、この都を守る砦でもある環状壁の形状は見事に澄んだ鐘音の伝達を促し、日暮れまで汗を流して働く全ての者達に、家路に着く時刻を知らせる役割を担う、大規模な音響板のようなものともいえた。

夕闇から藍色に変わり始めた空を眺めていた我が妹は、家の前を走る道を見渡した後、家の扉を閉め、振り返った。

「もうそろそろ帰って来ると思うから。どうぞ、火にあたって待っていて」

「ありがとう」

ゆっくりとした足取りで部屋に入ってきたその女性は、付き添いの母親と共に、ちいさな暖炉の前に置かれた、長椅子に腰を下ろした。

「ねえ？　　そういえばさ、あんたの兄さん、お城勤めは順調なのかい？　　目のことだってあるし、お城で無理してるんじゃないかと心配でねえ」

女性の母親の声に、妹はくすくすと笑い、温めたヤギの乳を入れた鉢と果物を載せた盆を運んでくると、机に並べた。

「さつき搾つたの。良かったら飲んで。七還暦生まれの赤ちゃんは大変なもの。今からうんと栄養をつけなくちゃ」

そう言つて、家を訪ねてきた母娘にヤギの乳を勧めると、妹も母娘と机を挟んだ向かい合わせの椅子に腰を下ろした。

「兄さん、あんまりお城の話はしたがないのよ。仕事が仕事だし、守秘義務があるからだと思うんだけど、夜遅くまで、ずっとひとり部屋に籠もつて、このところずっと朝寝坊なの。この間なんか、藁屑だらけで二階から降りてきたのよ。起こすのにちょっと張り切り過ぎちゃった」

ペロリと舌を出して笑つた妹に、相変わらずのんきな子だねえ。と、母娘も顔を見合わせて笑つた。

「でもまさか、ウルちゃんがお城で働くなんてねえ。最初聞いた時は、そりやもう驚いたけど、ふたりだけでずっと頑張つて来たんだもの。あんた達の父さんや母さんもきつと今頃、喜んでくれてると思うわよー?」

「うん。兄さんも、まさか本当に働けるようになるとは思っていなかったみたい。

お城から通知が来た時、部屋の中を立ったり座ったりして、ずっとウロウロウロウロしてたもの」

「うちに知らせに来た時も、手をワナワナ震わせて、口はまわつてないし、何言つてるのか全然わからないんだもの。もうつつきり、あんたに何かあったんだと思つて、おばさん慌てちゃったわよ」

「ただいま」

「あら。噂をすれば帰ってきたわ。お帰り、ウルちゃん」

城からの宿題を、どっさり抱えて家に帰ってみれば、わたし達が子ども頃からよく知っているおばさんと、おばさんの娘がわたしを待っていた。

「やあ、おばさん。レスイちゃんも。お久しぶりです」

「あらま。ウルちゃんたら、随分立派になっちゃって。お城はどうだい？」

おばさんが、瞳を丸くしてわたしを見ている。じつのところ、わたしの風体で立派になったところと言えば、妹が贈ってくれたためがね位なものだ。

わたしを小さな頃から知っているおばさんにとっては、めがねひとつに城仕えという身分が加わっただけで、とても立派に成長したように見えるらしい。

手放しで褒めてくれるおばさんを見ると、実際の、城でのわたしの扱いを思うと、なんだか申し訳ないような気にもなったが、わたしが今、とても恵まれているのは間違いない事なので、わたしは素直に笑顔を向けた。

「ええ。皆さんとても親切で、いろいろと教えていただいています」

既に、城の中限定ではあるが、隠し名を変えられてしまったこと

は、わたしの中の、ほんの微かな心の傷として黙っておいた。何よりも、それを口にした時の妹の反応を思うと怖い。

考えただけで嫌な汗が滲んできそうので、わたしは話題を変える事にした。

「ところで今日は、レスイちゃんですか？」

幼馴染みの、膨らみつつあるお腹を見つめて尋ねると、レスイちゃんはお腹を撫でて頷いた。

「ああ、そうなのよ。この子が心配しちゃってね。下手な街の薬師様より、幼馴染みのウルちゃんに診て貰えば安心だから。お願いできるか？」

「いいですよ。荷物を置いてきますから、少し待っていてください」
ホツとしたようにレスイちゃんが笑う。小さな頃から知っているけど、本当に笑顔の可愛い女性になったと思う。レスイちゃんのお腹に、赤子が宿っていることに気づいた時は、本当に驚いたけれど、それから何度か様子を診た後、どんなふうにいるのか、わたしも気になっていた。

二階のわたしの部屋に上がり、城から借りてきた分厚い書物を机に並べる。

楽しい作業ではあるけれど、これがいつまで続くのかと思うと、溜息が出た。

「兄さん、そろそろいい？」

部屋の扉から、妹が顔を覗かせた。

「ああ、いいよ。ちょっと待ってくれ。手を洗わないと」

「レスイちゃん、どうなのかしらね？」

心配そうな妹の声に、わたしは簡単に着替えを済ませると、妹の頭を撫でた。

「大丈夫だよ。大抵は出産までに、ちゃんと正しい位置になるはずだから」

妹とふたりで階段を降りると、長椅子をふたつ並べた上に柔らかい厚布が敷かれ、その上にレスイちゃんが横臥していた。

「仰向けだと辛いらしくてね。これでも大丈夫かい？」

「ええ。レスイちゃんが一番楽なようにしててください」

おばさんの声に頷いて答えると衣の袖を捲つて、先程、妹が用意してくれた湯の入った器で指先から腕までを洗い、長椅子に横たわるレスイちゃんの傍らに、椅子を置いて腰掛けた。

レスイちゃんは、わたしの様子をじつと見つめている。

わたしはニコリと笑って、レスイちゃんの頭を撫でた。

「大丈夫。お母さんになるレスイちゃんが、気を揉んだりすることが、一番お腹の子に良くないから。ボクがちゃんと診てあげるから、心配しないで見ててね？」

「……うん」

レスイちゃんは少し頬を赤くして頷くと、自分の衣をそっと捲った。

少し張り出してきた白い肌が覗き、わたしはその胎内から溢れ出る、命の脈動の眩しさに瞳を細めた。

其ノ参**夕暮れの訪問者

あまりにも、眩しい光。

わたしは掛けていたためがねを外し、傍らの机の上に静かに置いた。瞼を開くと、城に上がるまで長年慣れ親しんでいた視界が広がる。

よりはつきりと、胎内に宿る子の姿を感じ、わたしはそっとレスイちゃんのお腹に直に触れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レスイちゃんのお腹に宿る、ちいさな命の姿をじっと窺う。

溢れ出すように輝く胎児の身体は、健やかに育っていることをわたしに伝えてくれていたが、気になっていたその姿は、前回診せて貰った時から、ほとんど変わっていなかった。

今の状態で無理に動かすと、この子に負担がかかるかも知れない。

「レスイちゃん、少し足に触るからね？」

こくりとレスイちゃんは頷いて、足先をわたしに向けた。

足首の少し上あたり、内くるぶしから指四本ほど上がったところに指先を押し当てる。指先で強めの圧迫を何度か繰り返すと、レスイちゃんは微かに表情を歪め、まもなくお腹の子が、わずかに動いた。

足のツボを圧されているレスイちゃんが、少し痛そうな顔をしながら、わたしを見てニコリと笑う。モコモコと胎内の赤子が動くのを、レスイちゃんも感じているのだ。

「……………どうなんだい？」

全てが曖昧な視界の中、おばさんの心配そうな声が聞こえる。

わたしはレスイちゃんの足から指を離し、衣を元通りに直すと、その背に手を当ててゆっくりと彼女の身体を起こした。

「逆さ子は直っていませんが、よく動いているし、とても元気ですよ。まだ産み月まで時間があるので、これだけ動く子なら自分で回るかも知れません。キナを炊いて、もう少し様子を見ましょう」

机に置いてあるめがねを手に取り、妹の顔を見ると、妹は頷いて戸棚からキナと呼ばれる薬草を練って固めたものと、小皿を取り出してきた。

「少し熱いけど、すぐに身体が温まるからね。お腹は張ったりする？」

「……………少し」

わたしの問いに、レスイちゃんはお腹に手を遣り、ちいさく頷いた。

レスイちゃんの手を受け、わたしはいくつかのキナの中から三つを選び出すと、ひとつを手で割り裂いて、先端を尖らせた。

「兄さん、火を置くわね」

「ああ、ありがとう」

キナの先端を指で摘み、だいぶちいさくなった蝋燭の火が灯された小皿にかざすと、やがて、炎で燻されたキナから微かな煙が立ち上った。

煙の上がるキナを、横座りするレスイちゃんの足と小指に、そつと乗せる。

「……………不思議なもんだねえ。そんなところに燃やした薬草を置いて、逆さ子が直るなんてねえ。ウルちゃん以外に、やってるひとがいるのかい？」

「いえ、ボクも本で読んだものを、見様見真似でいろいろと試してきましただけで、趣味のひとつみたいなものですから。異国の薬学の応用なんて、立派な知識をお持ちの薬師様に叱られてしまつかも知れませんが、誰かに聞いてみたことはないですねえ」

キナの先端で燻るちいさな赤い火を、じつと眺めているレスイちゃんの額には、うつすらと汗が浮き始めた。お腹に置かれている手が、時々愛おしむように胎内にいる我が子を撫でる。

「……………動いてる」

「うん。元気ないいい子だね。レスイちゃん、毎日歩いたりしてる？」

「歩いてるわよお、わたしも一緒に。おかげで、おばさん痩せちゃったわー」

あはは。と、ふくよかな身体を揺らしながら陽気に笑うおばさん

の声に、妹とレスイちゃんもふきだした。

この元気なおばさんからレスイちゃんが生まれたなんて、彼女の大人しさからすれば想像もつかないけれど、性格そのものは良く似た母娘だと思う。

頃合いを計って、わたしはレスイちゃんの足からキナを取り去った。

其ノ肆**兄の眺める世界

「お疲れさま。少し遅くなっちゃったけど、ごはんにしましょう」

「うん？」

ああ、もうこんな時間か。道理でお腹が空くわけだ」

妹が野菜粥を温め、皿を並べて用意してくれている間、わたしはめがねを井戸水で丁寧に洗い、薄く柔らかくなめしたヤギの皮で丁寧に拭いていた。

汗や埃はめがねの大敵だ。大切に使わなくては城の仕事に支障が出る。

滲んだ視界の中、めがねを目の前まで持ち上げて顔を近づけ、慎重に硝子を拭いているわたしのもとに、鍋の火加減を見ていた妹がやって来て椅子に腰掛けた。

「貸して、やってあげる」

ぼんやりと滲む視界の中、ぼんやりと滲む妹の姿が見える。

全てのものの輪郭は二重三重に滲んでぼやけ、自分の手指すら自身の頭の影が、手のひらをほぼ覆いきる程に近づけなければ、しっかりとした線として認識できない、全てが曖昧で柔らかな線の描かれる世界。

ある意味、幻想的ともいえる視界の中、ぼんやりと滲む我が妹の姿を、これまたぼんやりとわたしは眺めていた。

ほんのちいさな子どもの頃には正常に見えていたはずの視力は、歳を重ねて芽生えた“奇妙な癖”の発覚と同時に、わたしから風光明媚なこの国の鮮やかな色と姿を少しずつ奪い、その輝きを封じていった。

他人の顔はおろか、両親や妹の目鼻立ちすら満足に識別できず、認識できるとすれば物の曖昧な輪郭と色の別のみという世界の中で相手の感情を全て声音で判断しながら生きるわたしに、大人達はこう言った。

七還暦に生まれた子には大切な役目が与えられているものさ。この国を選んで生まれて来る者を、どうか導いてやっておくれ。

わたしのように誕生時には身の奥深くで眠り、その後、芽生えを迎えた“力”と引き換えるように、ひととして在るべき感覚を失っていく子どもの身を案じ、望みを寄せる大人達の会話の最後に決まって出てくるこの言葉。

幸せなことに 本当は幸せな事に、私には例え曖昧でも自らを取り巻く世界を自らの目で感じることでできる幸運が残された。“力”が芽生えた、ほぼ全ての者が完全に盲めくらていく中、わたしにはわずかながらも、この目に視力が残されたのだ。そしてその代償か、わたしの中の“奇妙な癖”もまた、未成熟なかたちでその力を留めてしまっている。

どういう訳か、わたしには昔から女性の腹に宿る子が、逆さ子がどうかを確実に見分けられるという奇妙な癖があった。

この“癖”そのものは、七還暦生まれの者であれば国の中でひとりやふたり、同じ傾向を持つ者に出会う機会もあるのだが、その者

達は母親の胎内に命を宿す子の状態を見極め、安寧をもたらし、母親の腹に直に触れるだけで、逆さ子となった胎児の頭を正常な位置に戻すことができるという、特別な力を備えていた。

神に祈り、その通力を以て人々に道を開く巫女とは異なる力を持つ者。

彼等の力によって、子ども達は命を失う原因となる出産時の大きな危機を乗り越え、その後も力の庇護を受けながら健やかな成長を辿ることができた。

生まれ来る子ども達は水鏡のように、そのまま国の未来を映し出す。

母の胎内に宿る間は、この“子護り”の手に。生まれ出た後の子どもものの病の治癒への施しは、薬師の手に委ねられることになる。

わたしの場合“子護り”としての庇護を母子に授ける力の完全さに欠けていた。

こんな半端な力では無事に生まれ来るはずの命さえ、奪う事になりかねない。その恐れから、わたしはずっと自分の“癖”をひた隠しにして、ひっそりと生きて来た。

七還暦生まれの出来損ない わたしがそう呼ばれないように、父と母は、わたしと妹を常に一緒に行動させ、できないことは互いに補い合うのが兄妹の絆なのだと言いつつ口癖のように言い続けていた。

厳しい父と母だったが、わたしが“子護り”として生きるよりも通常の視力を持つ者と変わりなく自分の身の回りの世話ができ、見習いとはいえ、文官として城勤めをして暮らせているのは、父と母の愛のおかげであり、妹の助けがあつたことなのだ感謝している。

妹からみれば、どうもぼんやりと生きているように見えるらしいわたしでも、今や、この家の立派な稼ぎ手なのだ。“七還暦生まれ”という、見えない枷から解き放たれる生き方を選べたわたしは、例え道を歩いていて、わたしの脇を擦り抜けるように駆けて行く元気余りある子ども達の集団に、自分の足を続けざまに踏みつけられようとも、痛そうな顔をせず堂々としていなければならないのだと思う。

両手に大荷物を抱え、若干足を引きずるようにヨロヨロと歩くわたしを残し、子ども達は賑やかな歓声を上げながら、走り去って行った。

「はい、できたわよ。兄さん」

きれいになったわ。

妹はニコリと微笑んで、わたしにめがねを手渡してくれた。

其ノ伍**見習い書記官の特命

蠟燭の炎がふわりと揺らめき、燃える芯がちいさな音を立てている。

時折、カサカサとぎこちない音で文献の頁が捲られる以外には、動くものの気配さえない、静かな夜だった。

先程まで微かに聞こえてきていた妹の機織りの音が、いつの間にか止んでいる。わたしは大きく伸びをし、ついであくびもした。

ふあ……あ……あ……あ……。

凝り固まった身体を伸ばし、大あくびとともに出てきた涙を指先で軽く擦ると、わたしはちいさく息をついて、目の前に揃えて並べた文献をじつと眺めた。

「はあ……まだまだか。全て読み終える頃には、すっかりジイさんになっているかも知れないなあ」

どう考えても、わたしには荷が勝ちすぎるのではないかと思えてならない、その恐れ多いお役目に、わたしはひっそりと肩を落とし、またひとつ、溜息をついた。

いつになったら、わたしはまともな文官として働かせて貰えるのだろうか？

わたしと同時期に、城の文官として勤めることになった他の二名は、既に書記官として会議などに出始めているというのに。もしやわたしは、自分でも気づかないうちに、何かへまをやらかしてしまっただろうか??

わたしといえば、登城初日、上司であるクオル尉官とそのまた上司であるミルフ老師の意向のもと、大切な隠し名をあっさりと変えられ、そのまま“開かずの間”を思わせる、奥まった城の書庫に連れて行かれ、そのまま今に至るまで、その開かずの間で連日、膨大な量の文献整理に当たっている。

ひとりで仕事をすることも、会議に出られないことも、じつのところ不満という訳ではなかった。今まで体験したことのない出来事をわたしは充分に楽しんでいたし、所詮、この立派な城の中でわたしにできることなど、たかが知れていたのだろう。仮に雑用員として雇われたのだとしても、こうして働くうちは、わたしと妹の暮らしもそう悪いものにはならないに違いない。

それだけはわかっていたので、もともと物事を突き詰めて考える性格でもないわたしは、あっさりと気持ちを切り換え、埃だらけの文献と向き合うことに、専念した。

ひとりでもくもくと整理を続けるわたしのところに、時々、クオル尉官がやってくる。わたしの進捗状況の様子を見がてら雑談を交わすのだが、ある時、わたしが何気なく呟いたひと言を切っ掛けに、尉官はとんでもないことを言い始めたのだ。

「……………こちらの文献は、クニノウタ国歌の物語に、何か関わりがあるのですか?」

文献整理の手を休め、尉官と一緒にお茶を飲みながら尋ねたわたしに、クコル尉官は頷いた。

「ええ。そうです。これらの文献は皆、代々、城に仕える書記官達
が、この国に起こった出来事を書き綴ったものですから、國歌に関
わりの深いものも多いですね。．．．何かナタネさんの気にな
ることがありましたか？」

クコル尉官は上司でありながら、わたしのような年上の部下に対
しても、丁寧な言葉遣いをされる御方だ。本当はとても偉い御方な
のだろうに、こんなに気安くわたしが話をして良いものなのだろう
かと思いつつ、わたしは書棚に視線を向け、目的の文献を目で探し
た。

「何というか．．．これは、わたし達だけのことを書いたも
のでは、ないような気がするのです。歴史の内容はきちんと綴られ
ていますが、例えば、これと．．．これは。他の文献と比
べ、語られている出来事の記述に、ごくわずかですが偏りがあるよ
うな気がして」

書棚から慎重に古い文献を取り出したわたしに、尉官は驚いた様
子で頭上高くそびえる書棚を見上げた。

「あなたは、この文献の中身全てに目を通しながら整理をして
いるのですか？」

「ええ。あの．．．老師様が、興味があるものは好きに読ん
でくれて構わないと仰せでしたので．．．なにしろ時間だけ
は随分と余裕がありますし、珍しい貴重な文献も揃っていましたの
で、つい老師様のお言葉に甘えてしまい 立場もわきまえず、思

い切り読みふけてしまいました．．．．た、大変申し訳ありません」

日頃、あまり表情を崩さないクオル尉官の意外な一面に動揺し、めがねの奥で瞳を泳がせ始めたわたしに、尉官は慌てた様子で軽く両手をあげた。

「 ああ、いえ。違うのですよ．．．．そうですか。じつはここに収めた文献には、わたしの父が編纂に加わっていたものも含まれているのです。当代の王がご在位の間は、国歌の謳い替えは行われませんので、当分の間は誰かの目に触れる機会もないだろうと思っていたものですから．．．．この文献を目にしたのも随分と久しぶりです。当時のことを思い出しますよ。懐かしいですね」

「尉官のお父君も、こちらのお城に勤めていらしたのですか？」

父子二代で、文官として城仕えをされていることに、いたく感心して尋ねたわたしに、クオル尉官は人懐こい笑顔を見せた。

「ええ。わたしの父は城仕えの学者でしたから。この文献を編纂していた当時は、父についてわたしも何度か城に上がったことがあります。今はもう、わたしが常に城に上がっていることもあってか、父は隠居の身で、農夫の真似事などをしながら晴耕雨読の暮らしを送っています」

「そうですか．．．．尉官のお父君は、わたしとは全く逆の人生を送っておいでですね。そのような方がおられることが、とても不思議です」

お城に上がりたい者など、それほど掃いて捨てるほどいるだろう

に、その生活を捨てる方もいらつしやるのだ。そう思う気持ちを、ふと漏らしたわたしに、クコル尉官は微かに笑って言葉を続けた。

「ナタネさんは、登城前は農耕と遊牧の生活を繰り返していらしたそうですね。自然を相手に糧を得る民達の心を、あなたも身を以て知っておいでだ……。そうだ。以前からお尋ねしてみたいと思っていた事なのですが、あなたは読書もお好きなようですが、書くことはいかがですか？」

「は……。ええ。文献を読んで、いろいろと考えてみることは好きですが、誰かに見せられるような書き物自体は、試みたことすらありませんので、とてもひと前に出せるような物には、ならないのではないかと思えます。そんな機会もありませんし……。いや、想像しただけで汗が出ますね」

はは。

わたしののような学識のない者に、そんなことをお尋ねになるなんて、面白い考えをお持ちの御方だな。と、のんきに笑つわたしに、尉官は突然、水をぶっかけるような言葉を放った。

「ナタネさん。あなたに、次期国王の国歌謳い替えの為の記録の編纂と、その下準備を含めた、一連の作業をお願いしたいのです」

其ノ陸**見習い書記官の特命

「・・・・・・・・・・ わ、わわ・・・・・・・・わた・・・・・・・・つ、に
・・・・・・・・・・か、か・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・つつ！」

「・・・・・・・・・・にかい？」

茶の入った器を震える手で包み込んだまま、めがねの奥で目を泳がせているわたしに、クコル尉官は首を傾げ、ああ。と、納得したように頷いた。

「そうですね。編纂の準備に使っていただくには、この書庫では手狭でしょう。寝泊まりもできるようにしておいた方が便利ですし、この楼閣に一室、あなたの仕事部屋を」

「い、いえ！・・・・・・・・・・あの、そうではなく・・・・・・・・・・尉官。先程申し上げました通り、わたしはそういったことには一度も携わった経験がありません。ついこの間まで、ヒツジやヤギとともに野歩きをしていたわたしのような者に、じっ・・・・・・・・・・次代の、王帝陛下様の国歌編纂など・・・・・・・・・・あまりにも、荷が勝ち過ぎます」

・・・・・・・・・・つ、つまり、先程の“にかい”とは、わたしには荷が勝ちすぎますので、今一度、お考えを改められた方が と、言いたかっただけなのです。

あまりの出来事に顔を強張らせ、口の中でモゴモゴと言ひ募るわ

たしに、クコル尉官は微かな笑みを浮かべると、静かに腕を組んだ。

「ナタネさん」

「は、はい」

「じつは、あなたが文官の試験のために初めて登城され、お会いしているいろいろとお話を伺った際に、既に老師とわたしは、あなたにこの件をお願いできればと、そう考えていたのですよ。」

次代の國歌の物語の編纂に携わる者については、出自が学者や貴族の名家とは異なる者　つまり、この国を支える多くの民の日々の生活の苦楽を深く知り、彼等の心をそのまま國歌に映す事のできる者でなければなりません。次代の國歌の物語の編纂に必要なのは、文官としての深い知識や身分ではなく、民と同様の“目線と経験を持つ者”なのです。これは次期国王となられる、現王子殿下のご内意でもあります」

お、王子殿下の……ご内意？

王子殿下といえば、確かご幼少の頃に一般の国民から現王のお跡目選ばれ登城された方だと、妹が以前に話していたような気がする。噂では、いわゆる王族の御方としては、少々変わったところがおありの御方なのだと……たまたま、わたしがその“目線と経験”の条件に合っていたとしても、それこそどこにでもいるよくな、平々凡々としたヒツジ飼いがりの見習い書記官などに、そんな重大なお役目を任せようなどと、皆様は本気でお考えなのだろうか？

「……………」

沈黙しているわたしをどう思われたのか、尉官は机の上に積み重ねていた文献を手に取ると、最後の頁を開き、黙ってわたしに差し出した。

随分と長い時を経て開かれたのだろう、その古い頁には、文献を編纂した担当者の名と、家族　おそらく妻であり、子である者達の名が、連ねられていた。

「確かに、クニノウタは国民の心をひとつに纏め、その時代の国の歴史そのものを映し出すものでもありますから、それを纏めるにあたっていろいろと困難な事も出て来るでしょう。ですが、わたし達のように城の中で人生の大半を過ごす者は、例え職務上であっても、街に出て、民衆の生きる姿を知ることそのものが、彼等の警戒を呼び、王帝陛下や王子殿下への不信感を招くことにもなりかねません。役人が必要以上に街中をウロついて、民に無用な誤解を与えない為にも、街中を歩き、民達の中にあっても不審に思われることのない、あなたの助力が必要なのです」

「こちらは……編纂を担当された方が、書かれたものですか？」

クコル尉官の差し出す文献を手に取り、その古びた頁に綴られた言葉を眺めるわたしに、尉官は静かに頷かれると言葉を続けた。

「ええ、そうです。おそらく、この方は最後まで、御自分が國歌の謳い替えに携わっておられたことを、ご家族に伝えることができなかったのでしょうか。同じ思いのもと、この本に携わる者の目にしか触れない場所に、せめてもの形にと、このような言葉を書き残されたのだと思います。」

この任は、国家の内情に触れる部分も大きく関わって来ますので、編纂にあたり、ナタネさんにも守秘義務を担っていたただかなくては

なりません　　ナタネさんのご家族は、妹さんおひとりでしたか？」

「ええ。で、ですが、わたしの場合は家族の……妹の助けなしには、とても編纂の作業はできないのではないかと思います。集めた資料から覚え書きを作り、実際に文献を書き起こす時も、わたしに知識や経験が不足している分、同じ立場で物事を見ることのできる他者の視点は不可欠になってくるでしょう。それに例え、お役目のためとはいえ、妹をひとりきりで家に残したまま、わたしだけが城に留まるわけにも参りませんので……」

「わかりました。ではその件は、わたしから老師に伺っておきましょう。後は、ナタネさん御自身のお気持ちですが……」

「……尉官や老師様や、お役人の方々のご事情は承知致しました。」

わたしが編纂に当たるとなれば、こういった作業に慣れておいで
の文官の皆様よりも、御指南いただかなくてはならないことが、き
つとたくさん出て来るでしょうし、ご迷惑をお掛けすることも多い
かと思われませんが、わたしが適任であるとお考えの上で、お声掛け
下さったのでしたら、ぜひ、その……喜んで、勤めさせて
いただきたいと思います」

尉官が差し出された文献の最後の頁には、家族の名前の後に感謝
を述べる言葉が綴られていた　　できることなら直接口伝えにした
かったであろう思いが滲み出てくるようなその言葉達を眺めている
うちに、例え力不足でも、自らの努力でそれを補えと　　父や母な
ら、そう言ってくれるのではないかと思えたのだ。

「そうですね！　よかった。わたしも老師も、あなたならきつと、
次代の王帝陛下の御世に相応しい国歌の物語を、編纂して頂けるだ

ろうと期待しています。

「……ああ。あなたの仕事の手を止めてしまいましたね。では、作業の詳細については、また後日にも話しましょうか」

「は、はい　よ、宜しくお願い致します」

クコル尉官は微かに笑って頷かれると、静かに書庫を後にし、一礼して尉官を見送ったわたしは、尉官の後ろ姿が扉の向こうに消えた途端、どっと気が抜け、ヨロヨロと傍らの長椅子に座り込んだ。

なんてことだ。どうしよう!?

「いや。今更、どうしようだなんて、言うてはいられないのだが。」

何だかとんでもないことに……もし、老師の許可が降りなかった場合、いくら守秘義務があるとはいえ、あの勘の鋭い妹に隠し事だなんて、このわたしにできるんだろうか……これはずい、非常にまずいぞ!!

“わたしには隠し事があるが、それが何かは聞いてくれるな!”

そうスッパリと言い切れたなら、どれだけ良いだろうか?

「……はあ」

まだ、老師様からの返答が出ていないにも関わらず、妹の反応に気を揉んで、額に汗を滲ませたわたしは、ひっそりと溜息をついた。

其ノ漆**見習い書記官の特命

「兄さん？ まだ起きてる？」

扉を叩く音と、妹の声に、わたしはハッと我に返った。

「あ、ああ。今開けるよ。ちょっと待ってくれ」

慌てて城から借りてきた文献を片付けると、わたしは椅子から立ち上がった、扉を開けた。

「ごめんなさい、作事中に。今日、兄さんに荷物が届いてたの。明日、レスイちゃんのところに行くなら、お姐さん達のところにも立ち寄るでしょう？ もし、手伝いが要るならと思って」

「あ。そうか、そろそろ薬も要るだろうね。手伝ってくれるかい？」

「ええ。そう思って支度しておいたの。お城の仕事も大変でしょうけど、落ち着いたら下りてきて？ わたし、先に始めているから」

本を読んでいるのなら、もう少し灯りを増やしておくわね。

妹は、両の手に持っていた蠟燭の明かりをわたしの部屋に置くと、椅子に掛けてあった上着をわたしの肩に羽織らせ、部屋を出て行った。

「そうか、明日は非番だっけ」

妹が羽織らせてくれた上着の袖に腕を通すと、わたしは立ち上がって、妹の待つ階下へと降りていった。

「あら、もついいの?」

「ちょうど、切りが良かったんだ。どれ、替わるよ」

妹が碾いていた石臼の前に私が座り、ゴロゴロと音を立て始めると、妹は荷物から石の塊をいくつか取り出した。

「このくらいで足りるかしら?」

「ああ、いいね。今回はどうだい?」

「ええ、おじさんと一緒に見比べて、一番良さそうなものを選んで貰ったの。しばらく顔を見ていないけど、ぐうたら兄さんは元気か?」
「って」

「……別に、ぐうたらしてるつもりは、ないんだけどなあ」

「いいのよ、兄さんはそれで。おじさんだって、本気でそう思ってる訳じゃないと思うわ。おまけもしてくれたし」

見て? ホラ、素敵でしょ?

妹はニツコリと笑うと、衣の懐から綺麗なかんざしを取り出して、髪に挿した。

「やあ、いいね。いつもそういっているので、髪を飾っておけばいいのに」

「働いてる時は、あちこち動き回るから、壊しちゃうかも知れないもの。なんだか勿体なくて」

それでも、妹は嬉しそうに、そのかんざしの先でキラキラと揺れるちいさな飾りに指先で触れると、火に掛けた鍋を掻き回し始めた。

「兄さん、そっちができたなら計って持ってきてね」

「ああ、秤はどこにあったっけ？」

「いやだ、目の前にあるでしょう？」

「ああ、ああ。そうか」

机の上に置かれた異国製のその秤には、二枚の皿が載せてある。

目盛りの中心に秤の針を合わせた後、それぞれの皿に、目安となる石の塊と羊皮紙を置き、羊皮紙の皿の上に、石臼で碾いた鉾石の白い粉末を、さらさらと載せた。

若干、瞳を寄り目にしながら、釣り合いが取れるよう、慎重に粉末を加えると、そつと椅子から立ち上がり、鍋を火に掛けている妹のもとに慎重に運んでいく。

「これで、ええと……六ピリカか。あと、三回分くらい碾けばいいかな？」

「うん、それだけあれば、お姐さん達の分も作れると思うわ　ね　え、もうこのくらいで良いかしら？」

「ああ、良さそうだね。どれ？・・・うん、いい頃合いだ。あまり固まらないうちに混ぜてくれ」

再び椅子に腰掛け、石臼をゴロゴロと碾き始めたわたしに、妹は鍋の火加減を見ながら話し始めた。

「ねえ？ 兄さんのお城でのお勤めには、お世話になってる方もいらっしやるでしょう？ 一度、家にご招待した方がいいんじゃないかしら？」

「・・・え、家に？」

「だって、兄さんみたいに文官のお仕事に慣れていない元ヒツジ飼いに、いちから仕事を教えていくなんて、とても大変だと思うもの。お忙しいとは思うけど、一度ご挨拶もさせていただきたいし・・・
・家みたいなボロ家じゃ、兄さんが笑われちゃうかしら？」

「いや、そんな事はないよ。クコル尉官はそんな方じゃないと思う。そうだね、尉官は王子殿下の側仕えもなさっておいでだから、家に来ていただけるお時間があるかわからないけれど、一度聞いてみるよ」

「王子殿下の、お側仕えの方って・・・もしかして、黒髪黒目の御方？」

「ああ・・・そうだけど、なんでおまえが知ってるんだ？」

我が妹と尉官様のような方が知り合いだとは考えにくく、首を傾げたわたしに、妹は呆れたように溜息をついた。

「もう。兄さんたら、お城勤めのくせに知らないの？ この国の王子様と尉官様は、おふた方とも黒髪と黒い瞳でいらっしやるでしょう？ わたしくらいの歳の娘ならみんな、土学寮で先生として教えてくださいっている尉官様のことを、『土学寮の黒王子』って呼んでいるのよ？」

「へえ。そうなのか……？」

「本物の黒王子様にはとても手が届かないけれど、尉官様は王族じゃないもの。もしかしたら妻になれるかも。って、憧れている娘は多いのよ。お人柄も優れた方みたいだし」

「はあ、妻ねえ……もしかして、おまえもそうなのかい？」

「いやだ、違うわよ。兄さんたら。ただの噂話だつてば。第一、尉官様がわたし達みたいな庶民を、相手にする訳ないでしょう？」

妹は髪飾りを揺らし、屈託のない笑い声をあげた。

其ノ捌**非番の日

翌朝、大門を開く銅鑼の音を聴き終えてから、わたしはずっしりと重たい荷を手に、妹に見送られて家を出た。

第二環状区にあるわたしの家から、大門のある第一環状区まで歩く間に、都の朝市を指して緩い坂道を上ってくる、何台もの馬車や荷車と擦れ違ふ。

今日は国の公休日だ。第二環状区には商いを生業とする民が多いためか、あちらこちらにあるたくさんの広場で、休日毎に市が開かれ、身に着ける衣の類から、飾り物、武器防具、異国の古物、ヒツジヤヤギ、仔牛の競りまで行われている。

わたしもよくひとりで市へ出掛け、この国ではなかなか目にするここのできない品物を、ぶらりぶらりと目的を決めずに歩きながら眺めて回ることを、楽しみにしている。

市に集まる商人達は物知りで話し好きな者が多く、彼等の話を聞いているだけでも飽きなかった。

馬車や荷車、子ども達の暴走を避け、脇の細道に入ったわたしは、路地の合間の頭上で細長く切り取られた青空を眺めつつ、やがて区境にぐるりと巡らされている環状壁の通用門へと辿り着いた。

「……………あれ？ 今日がここが馬車門なのかい？」

普段よりも大きく開け放たれた扉の幅に気づいて、門番の兵士に尋ねると、兵士は渋い顔をして頷いた。

「ああ、悪いな。今朝、馬車門の近くで、競りに出す牛が暴れて脱走したんだ。とんでもなくばかでかい荷牽き牛で、上手く扱える奴もいないし大騒ぎでな。おかげで門はそいつに体当たりされてぶっ壊された挙げ句、閉鎖だよ。門柱まで歪んじまった」

「……門柱を歪ませる暴れ牛か。それは見てみたかったなあ」

「兄さんみたいにのんきに歩いてたら、角に引っ掛けられて大怪我してるんじゃないか？ 今頃、あの牛は角を切られてるはずだ」

「角？」

興味を惹かれ、おうむ返しに尋ねたわたしに、わたしとそれ程変わらない歳に見えるその兵士は、腰に下げた剣の束に手を掛け、姿勢を少し崩して笑った。

「ああ。あのままじゃ、いつまた暴れ出すかわからないし、危なくて誰も近寄れないからな。角は二本とも切っちゃまうとか言ってたぜ。もともと荷牽きの牛だから、角はいらないんだぞうだ」

「へえ………欲しいなあ」

「は？ 欲しいって、角が？」

「ああ。何かに使えないかと思ってね」

「へえ。オレの仲間がちょうどあの門の番をしてるから、もしどこかに持って行かれてなかつたら、取っておくよう、話しておこう」

か？」

「やあ、ありがたい。無理にとは言わないから、是非とも頼む」

「はは。遠慮してるのか、強引なのか、どっちなんだ？ 牛の角が欲しいだなんて面白い男だな、あんた。女を呼び寄せる特別な角笛でも作るのかい？」

「ああ、それでもいいな。じゃあ、今度また寄るから、覚えていたら頼むよ」

「あ、ちよつと待ってくれ！ 兄さん、名前だけ聞いておいてもいいかい？」

「ユチだ。ナタウルネ・ユチ」

「へへ。兄さん、見掛けによらず、随分可愛らしい隠し名だなあ。その名じゃ、男から恋文のひとつやふたつ、貰ったことあるだろう？」

「ああ。おかげ様で男には随分モテたよ。実際に会うまでだけどね」
昔を思い出し笑って答えると、兵士は豪快な笑い声を上げた。

「そいつはお気の毒だな。さぞやがっかりされたらろう？」

「ああ。だまされたって、文句言われたこともあるよ。じゃあ、よろしく」

「ああ。じゃあな、綿毛ちゃん」

綿毛ちゃん。わたしの名前の一部“ウルネ”は、この国の言葉で『綿毛』という意味を持つ。正しく発音するなら“ウル・ネ”だ。ウルは『空を舞う』、ネは『種』を表す。

ちなみに、わたしの隠し名である“ナタウルネ”は、この国の言葉では『タンポポ』を意味する。残った言葉“ユチ”は『狼』。つまり、わたしの隠し名は、直訳するなら『狼のタンポポ』になる。

我が国に限らず、草原の民を祖とする全ての遊牧民にとって、狼は神獣にあたる。野に咲く素朴なタンポポと、野を逞しく駆け抜ける狼。大地に生きる遊牧民らしい名前だが、双方を連ね、ひとつの名として使うには、随分と両極端な名を授かったのかも知れない。

第二環状区の門を抜けると、そこからは段々畑と裾野に広がる麦田、水車小屋に水田などが隙間なく続いている。

この国の頂き、『天楽区』と呼ばれている特別区域から流れ出ている、幅広の川沿いに道は続き、やがて遠くに霞む第一環状区の大門に辿り着けば、酒場や待合いの宿屋などの旅人相手の店が所狭しと並び、賑わいを見せるこの国の歓楽街に行き当たる。

手にした荷を届けるため、遠くに立ち並ぶ歓楽街の一角を目指して、わたしは大門への道をのんびりと歩き続けた。

田畑の合間を真っ直ぐに伸びる大門への道には、たくさん荷を積んだ馬車や牛車が行き交っている。その中で荷台に男女の子どもを乗せた、一台の馬車がわたしの傍らを通り過ぎた。

もうもうと舞い上がる土埃の中、わたしが荷を抱え直していると、子ども達が突然、甲高い声で父親らしき男に向かって騒ぎ始め、や

がて走っていた馬車は徐々に速度を緩め、路肩に止まった。

御者台から、ひらりと地面に飛び降りた男は、被っていたコンチを背後に脱ぎ落とし、瞳を丸くすると、プサの裾を風に翻しながら、わたしに近づいてきた。

「あれ？ ユチ先生じゃねえですか？ どちらかにお出掛けで？」

「あれ？ ユチさん、お久しぶりです」

ふたりの大人の男が、あれあれ言いながらお互いの名を呼び合う姿に、荷台に乗った子ども達が、真似をし合い、声を上げて笑った。

「あれだつてー」

「ユチさんだつてー」

「コラ。いつまでも笑ってねえで、行儀良くしろおまえ達。ホラホラ、降り

て、ちゃんとユチ先生にご挨拶しな」

父親に軽く頭をポンポンと叩かれ、荷台から手を繋いで降りてきた少年とその妹の少女は、近過ぎるほどに、ぴったりとわたしに寄り添うと、ふたりとも踏ん返り返るようにして、わたしを見上げた。

「ユチ兄ちゃん、こんにちはー！」

「こんにちはー！」

少女が、ちいさな手のひらをわたしに向けて伸ばして来るのに気

づき、わたしは、しゃがみ込んで少女の手を取ると、わたしの頬に触れさせた。

丸い瞳を見開き、わたしを通り越した先のどこか一点を見つめたままの少女は、わたしの喉元にスツと手のひらを滑らせた。

「声、出してー」

「あああああ~~~~~」

少女に応え、わたしは口を大きく開け、わざと低い声を震わせるように喉の奥で唸ると、少女は笑い声をあげた。

「びりびりー」

「ボクも！ ボクにも触らせてっ！！」

この少女が生まれたのも、ちょうど七還暦だった。母親は少女を産んだ後、産後の肥立ちが悪く、命を落としている。わたしがこの親子に『先生』と呼ばれているのは、逆さ子として腹の中で育ったこの少女の“子護り”だったからだ。

少女は生まれて最初の一還暦の間に、幾度も病を得た後、視力を完全に失っていた。榛色の美しい瞳。なにも見えていないことが、なんとなく頷けてしまう程、宝石のように澄んだ瞳を持つ少女は、明るい色の髪を背中まで垂らし、きれいな髪留めで飾っていた。

「素敵な髪飾りだね。兄さんにやってもらったのかい？」

「うん。お兄ちゃん、上手なの」

「ホラ、見て？ ボクの髪も伸びて来たでしょ？」

見れば、少年の後ろ髪は短いながらも束ねられ、革紐で結わえられて、ぴよこんとはねていた。

「ボク、櫛羅様のお祭りまでには、格好良く結えられるようになるからね」

「ねー」

えっへん。

妹の手を繋いだまま、少年は得意満面の笑みを浮かべた。

聞書 うまれいづる娘 壱

今から記すことは、わたし自身の記憶によるものではない。

ポロチセ館に向かう、わたしが出会った親子、オウルフ・ユチさんと、その子どもたちである兄妹 特に、妹のユカラちゃんの出生にまつわる話を聞書ききがきしたものだ。

狼を殺した父と、狼に殺された母、そして、その狼達の長を、もうひとりの母とするユカラちゃんの話、この国に生きる民の姿を映す記録のひとつとして残しておくべきだと、わたしは思ったのだ。

わたしは“子護り”の師である、婆様ばようから、ユカラちゃんは、古くから草原に暮らしてきた遊牧民全てにとつての神獣、白銀の狼テングリの娘だ。と、聞かされた事がある。祭りの酒の席での話ではあったが、子護り衆の長であるヤヨスラ婆の言葉には、当時、ヤヨスラ婆の庇護を受ける、駆け出しの子護り役であつたわたしにとつて、笑つて聞き流せないほどの、重みのあるものだつた。

「……あの子ほど、深い呪いと恵みのもとに生まれ落ちた赤子はおるまいよ。そして、それを見守るこの婆の命は、炉の隅に残るわずかな埋み火のようなものじゃ。ウルよ、おぬしにあの娘を託したいが、どうかね？」

「なんと!?! 婆さまはあの子を、半人前の働きがやつとの者に、預けなさるおつもりか?？」

「それはなんともお気の弱いことじゃ。婆様は、たとえ骸むくろになろうと、ユカラに喰らいついてゆくかと思つたが?？」

ドツと笑い声上がる中、子護り衆に酒をついで回っていたわたしは、傍らのヤヨスラ婆の杯に酒をつぎ、姿勢を正すと頭を下げた。

「婆様。あの……皆の言うとおりですよ？　ボクは婆様から、まだまだ、たくさん学ばなきゃならないことが、あるんですから」

「なあに、子護りが学ぶことなど、片手の指を順繰りに折れば足りる。そんなことよりもな、この婆はおまえさんにユカラの末を見届けて欲しいのだよ。このとおりだ。老いぼれた婆の願いを断るもんじゃないぞ。な？　ウル坊よ？」

ヤヨスラ婆は、皺だらけの節くれ立った手でわたしの胸に触れ、髪を撫でながら、落ちくぼんだ瞳でじっとわたしの顔を見つめた。

「ユカラはな、特別扱いをして育ててはならぬ子だ。父と兄とともに、草原と都を行き来し暮らしていくことが、あの子の、ふたりの母の望みでもあるよ。よし。今からな、婆が、ユカラの生まれた時の話をしてやる　ああ、酒なんぞは飲みたい者が勝手に飲むわ。放っておけ」

ちいさな身体で円座の上に座り直し、煙草に火を点け、旨そうに煙を吐くと、ヤヨスラ婆は燃えさかる炎を見つめ、瞳を細めた。

「……あの夜のことは、今でも忘れられぬよなあ。深い闇に覆われた草原を渡って、産屋に向かう馬車の中でも、風に混じって、狼達の騒ぐ声が遠くから聞こえていた。雷が鳴るばかりで雨は降らず、鈍く黄色に染まった山向こうの空から、次々と黒雲が押し寄せてくる。産屋に向かうのを馬達が厭うて厭うて、なかなか脚も、

進まなんだ」

ヤヨスラがようやく草原の産屋に着いた頃、既に先着していた娘のポポリが、出産の仕度を調べているところだった。

「ああ、母さん！ もう二日目なのよ？ 奥様が辛そうで、わたしはどうしてお慰めすれば良いのか……」

「子を産むでもないおまえが、そんなに死にそうな顔をしていたら、メノワが心配するだろう。さあ、しっかりおし。熱い湯を途切らせちゃいけないよ」

産褥に備えた仕切りの天幕をよけると、ヤヨスラは床伏している、メノワの傍らに座り込んだ。

「まあ……婆様、すみません」

「ああ、動くな動くな。楽にしていなされ。子は動いているかね？」

ヤヨスラの姿に、身を起こそうとしたメノワを制して、ヤヨスラはメノワの衣を捲ると、腹に手をあてた。

「ええ……でも、なかなか、顔を見せる気になっしてくれませんか」

「ふむ。余程、そなたの腹は、居心地が良いらしいのう」

疲労の影が滲むメノワの、ふくらんだ腹の赤子をあやすように、ヤヨスラは皺を濃くして笑った。

「まあ。母親としては、とても嬉しい言葉だけれど、早く顔が観たい……ん……っ!!!」

ヤヨスラの言葉に微笑んだ途端、メノワは疼痛に顔を歪めた。

「痛みは少しずつ間近になってきています。母さん、そろそろお願いできない？」

傍に控え、メノワの手足を湯に浸した布で拭うポポリの声に、ヤヨスラは頷いて立ち上がった。

「どれ、あまり急いても良くないが、このままではメノワも辛かるう？ 仕度をするから、ユチにしっかり見張りを頼んでおいておくれ」

「それが……旦那様は、まだお戻りにならないのよ。その……狼達が、すぐ傍まで来ているって、大層お怒りになられて、先程、追い払いに出て行ってしまったの」

口ごもったポポリに、ヤヨスラはちいさく頷いた。

「やれやれ。ことがことだけに、産屋から遠ざけたい気持ちも分かるが、今は、狼どもを追い散らすより、湯の番などしてもらった方が、よほど役に立つだろうにのう。仕方あるまい、好きなだけ追わせておけ。男はここにも気を揉むばかりだ。追うのに飽いたら、いずれ戻って来るだろうよ」

「婆様……狼達が、この産屋の近くまで、来ているのですか……？」

痛みが去り、ひと息ついたメノウが身を起こそうとするのを、ポポリが慌てて駆け寄った。背を支え、身を起こす間に、火に掛けられた鍋からヤヨスラは温めた山羊の乳と麦粒を混ぜた粥を皿に掬い、メノウのもとに運んできた。

「メノウや、これを飲みなさい。少しは腹に入れておかねば、おまえさんも赤子も、これからが山場だからね。ふむ………狼どもが、人間の産褥の場にこれほど近づくとはな………?」

「婆様。この子が生まれた後も、わたしは………この子から離れずにいられるでしょうか? こうしてお腹の中に入れても、この子が………どこか、遠い所に行ってしまうような気がして………ならないんです」

自らのふくらんだ腹を愛おしげに撫でて呟くメノウの手を、ポポリは両手で包み込んだ。

「まさかそんな! お子様はきつと、奥様のお手元で立派にお育ちになりますよ。さあ、お子様のためにも、少しでもお召し上がりになりますと、お身体が負けてしまいます。母もわたしも、おふたりのお側におります。どうぞご安心なさってください」

「ええ………そうよね。ありがとう。ポポリ」

微笑んで頷き、ポポリの勧める粥の椀を手にしたメノウの姿をじつと見つめていたヤヨスラは、天幕を潜って隣の部屋に移り、静かに腰を下ろすと、懐から布と玉石を取り出した。

パチリと枝の爆ぜる音とともに、焚き火の明かりがトシカ为天幕を揺らしている。

握った玉石を軽く投げるように、布へと放ったヤヨスラは、口の中で何ごとかを呟きながら、玉石を動かし始めた。

「母さん、旦那様がお戻りになられたわ。狼達は、もう近くにはいないそうよ」

「ふむ……そうか。ユチには、このまま外を見張るよう伝えておくれ」

「ええ。でも、旦那様が、母さんに会いたいです」

「今は、手が離せない。いずれにしろ明日の陽が昇るまで、狼どもは落ち着かぬよ。おまえは戸口で、自分の家族をしっかりと守れと言っておやり」

草原の彼方の山並みに陽が落ち、風の吹き荒れる夜がやってきた。狼を射る弓矢を傍らに、じっと深い闇に向かって目を凝らしていたオウルフ・ユチは、時折聞こえてくるメノワの苦しむ声にとつとつ腰を上げ、勢いよく天幕を捲り上げてヤヨスラの籠もる産屋に足を踏み入れた。

「どうなんだ、婆様？」

「まあ、お待ちよ……どれ、ようやっと見えてきたか……」

幾分疲労の増したように見えるヤヨスラの後ろ姿に、ユチは焚き火の向こう側、ヤヨスラの対面に回り込みどっかりとあぐらを掻いてメノワの産褥が設えられた隣室を苛立たしげに指差した。

「もう丸二日は経ってるんだぞ。いくらなんでも遅すぎるんじゃないのか？」

ゆったりと手を動かし続けるヤヨスラは、ちいさく息をつき、減り続けてゆく玉石の中のひとつを手に取ると、じっと見つめた。

「ふたり目とはいえ、女にとっては命を賭けた大仕事だ。男が魚を釣るようにそんなに簡単にボコボコ生まれるわけがないだろう・・・
・・・狼どもがやけに騒ぐね。そろそろ産み時に近づいたか、それとも母親の命を獲りに来たか・・・」

「母親！？ 占手は何を示したんだ？ メノウは、メノウはどうなる！？」

ヤヨスラに詰め寄らんばかりの勢いで大声を上げたオウルフは腰を上げかけ、隣室から聞こえてきたメノウの悲鳴混じりの呻き声にハッと我に返ると、やるせない心の内を吐き出すように溜息をつき、再びヤヨスラの対面に腰を下ろした。

ヤヨスラはたったひとつ残された玉石を手にとると、深く瞳を閉じた後、ゆっくりと対面に座すオウルフを見つめた。

「オウルフ・ユチよ。よくお聞きな。わたしたちは狼の庇護と呪いからは逃れられない。あなたはメノウのために狼を殺した。ひとつしかない自分の命を守るためだ。例え神獣とはいえ、仕方あるまいよ。だがその狼は、決して手を出してはならない腹に仔を宿した雌だった。狼どもはもうじきここにやってきて、おまえのメノウを喰らうだろう。命は命で繋ぎ、身勝手に断ち切ることは許されない。これが占手の示した道だ」

ヤヨスラから告げられた言葉にオウルフは顔色を失い、はじけるように腰を浮かせた。

「そんな……！！ ポポリ！ ポポリ！！」

隣室から疲労を濃くした様相のポポリが現れ、涙混じりにオロオロとゲルの中を歩き来し始めた。

「随分と難儀されておいでです。ちっとも子が降りて来てくれませ
ん」

ポポリの言葉を耳に、ヤヨスラは広げていた布の上に玉石を集め、くるむように畳むと懐にしまい込んだ。

「自分が母体の外に出れば、まもなく母との別れがやってくる。それを感じているのだよ。身動きひとつせずにいつまでも眠っておれば、悲しい目にも遭わずに済む。だが、生まれる気のない子を長く腹に留めておけば、これもまた母体には障るだろうよ」

「 母さん！ なんとかならないの！？」

ポポリの悲鳴混じりの声に、ヤヨスラは表情を変えずに淡々と言葉を返した。

「一度心を決めた狼が、聴く耳を持つものか。生まれるまでは手出しをしまい。生まれた子から母を奪うためだけに子を生かし、自分達の仔を殺めた母を喰らうのさ」

「殺したのは俺なんだぞ！ なぜ俺を狙わない！？」

激昂するオウルフをヤヨスラは静かに見つめ、懐から羊皮紙を取り出すと、床にひとつ残されていた黒い玉石を包んで握り締めた。やがて開かれた手の上で粉々に崩れた玉石は地面に散り落ち、後に残された紙には、黒々とした狼の横顔が浮かび上がっていた。

「……………占手は赤子の未来に、狼を示したのか……………
? なぜ……………??」

「“狼”の名を持つおまえさんは、それだけでこの草原と狼達の庇護を受けておる。たとえ丸腰で草原に立ち、手足を全て喰いちぎられようと、それでもユチの名を持つおまえさんの命は奪えまい恨みは、その者の最も大切な者に向かう。それが業というものだ」

「業を受けるのは俺だけじゃない！ 工オはまだ、たったのみつただ！ 今も母親を恋しがってメノワの衣にくるまつたまま泣きどおしだ。俺は工オに、母さんと生まれて来る子を連れて帰ると約束した。婆様、俺にはもうどうする事もできないのか!？」

悲痛な叫び声を上げるユチの前に、ヤヨスラは落ちくぼんだ瞳を小さくしばたかせると、黒々とした狼の影を映した羊皮紙を炎にくべた。

「ここでただメノワと子の死を待つか、子を残して逝かねばならぬいメノワの苦しみを、ともに負って生きるか、選べる道はどちらしかない。狼達は優しいよ。選ぶ自由をおまえさんに残してくれたさあ、どうするね？」

「……………」

きつく拳を握り、唇を噛み締めて頂垂れるオウルフの背後で、そ

つと涙を拭っていたポポリは、ハツとしたように隣室に飛び込んだ。

ちいさな問いかけの後、再びポポリは姿を現した。

「オウルフ！ メノワがあなたを呼んでいます。どうか傍に……
・声をつけてあげてください」

ポポリの声に、オウルフは衣の袖で頬を伝う涙を拭くと、立ち上がった。

「婆様。狼が与えた自由を……俺は選ぶぞ」

「ああ、それでいい。メノワもきつと喜ぶだろうよ」

ヤヨスラの静かな声にオウルフは唇を噛み締め、メノワの床伏せる産褥との狭間を仕切る天幕に手を掛けると静かに隣室へと入っていった。

聞書 うまれいづる娘 貳

隣室には母と生まれてくる子を励ますように、煌々と灯りが点さ
れていた。

湯の沸かされた静かな音の中、オウルフは仕切りの天幕をよけ、
床に伏せる妻の傍らに腰を下ろした。

背の後ろに布団を宛て、ふくらんだ腹をゆっくりとさすりながら
時折波のように迫る陣痛を堪え喘ぐメノワの傍らで水に浸した布を
絞り、そつと妻の額を拭った。

「……………あなた……………戻つて来てくれたのね」

「遅くなつてすまなかつた。すごい汗だ……………辛いだろう？」

手を取る夫の瞳がわずかに赤く充血していることに気づいたメノ
ワは、微笑んでオウルフの手を握り返すと、自らのふくらんだ腹へ
と導いた。

「そうね、今は大丈夫。随分元氣の良い子なのに、なかなか降りて
来てくれなくて……………生まれたらきつと忙しくなるわ。エオ
は喜んでくれるかしら？」

「もちろんだとも！ おまえの顔が観られないと泣きじゃくっては
いたが、この子の誕生はとても楽しみにしているよ。なんたつて初
めてのきょうだいだもんな。だからしっかりと氣を持って、元氣な
子を産んでくれ」

「ポポリもね、もうずっと長い間眠らずにわたしの面倒を見てくれるし、婆様も傍について居てくださるから、大丈夫よ……ん、っ……痛た……お父さんが来たのがわかるのね？……いい子ね、可愛い子。わたし達の……っ、ああっ……!!」

陣痛の波が押し寄せ、メノワの表情が苦痛に歪む。ポポリがメノワの腰をさすりながら開かれた脚の間を窺い始めた。

「奥様、お苦しいでしょうけれど、息をゆっくりと吸って、吐いて……そうそう、お上手ですよ」

額に汗を浮かせ、身を擦っていたメノワはやがて陣痛が遠のき、大きく息を吐いた。

「産み時が近づいています。お子様も頑張っておいでですよ。もう少しですからね」

顔を上げたポポリは額の汗を拭くと、傍らの湯で手を清めなおし、メノワの背に手を伸ばした。

「だいぶ産み口が開いて来ました。メノワ、身体を起こせますか？少しずつ……オウルフも手を貸してくださいな。脇を抱えてあげて下さい。ゆっくりですよ」

ポポリとオウルフのふたり掛かりの介助で身体を起こしたメノワは、ゆっくりと仰向けから身を起こすと膝をつき、四つんばいの体勢になった。腹の中の赤子の重心が下がり、メノワは痛みに頬を歪めながらも、ふたりに笑顔を向けた。

「痛たた……ああ、でもこの方が、だいぶ楽だね。仰向けのままでいるのはどうしても苦しくて。これなら息も十分に吸えるし、きつと……もうすぐね」

「少しはお楽になりましたか？ 奥さまは十分に耐えておいででございますよ。大丈夫、もうすぐですからね」

肩や背、腰をさすりながら励ますポポリの声に、メノワは間隔が徐々に狭まる陣痛に堪えるように悲鳴を上げながら、ゆっくりと肩で大きな呼吸を繰り返した。苦しむ妻を前に、居ても立ってもいられないオウルフは、腕組みをして落ち着きなく産褥の間をウロつき始めた。

「奥さま！ カンでは子が苦しみます。どうか、どうか力を抜いて……そうです。上手ですよ」

必死に子の生まれる瞬間に臨んでいるメノワに声をかけ続けたポポリは、あまりの壮絶な場に顔を青くしたままその場に立ち尽くしているオウルフを見上げ、大声を上げた。

「オウルフ、突っ立っていないで手を！ 手を握ってあげて！！……あ、見えました！ さあ、いきんで、そう、もつともつとまだまだ……今、頭が出ましたよ！ さあ、わたしが受け止めますから力を抜いて……短く息を、そうです、オウルフ！ 奥さまの身体を横にして差し上げてください、ゆっくりと……あら？ 女の子ですね！ 奥様、女の子のご誕生ですよ！」

元気な産声が響き、血にまみれ、泣き叫んで自身の肌を真っ赤に染めた嬰兒が取り上げられた。ポポリの手で産湯に浸かり、手際よ

く真新しい衣にくるまれた赤子は、ぐったりと横たわるメノワの傍らに連れて来られた。

「女の子・・・・・・・・元気な子ね、良かった・・・・・・・・」

赤子のちいさな手をそつと握り安堵の表情を浮かべたメノワに、涙ぐんだまま何度も頷いていたポポリは、気を取り直すようにメノワに語りかけた。

「さあ、この子は母さんをお願いして、奥様も残り産をすませてしましましょう。もうすぐ痛みも引きますからね、あと少しですよ。頑張つて！」

ポポリの母を呼ぶ声に、仕切り幕の向こうから姿を現したヤヨスラはポポリから赤子を抱き受け、その頬と手のひら、足、額を順に指先で軽く擦り、祈りのまじないを唱えた。

「婆様・・・・・・・・どうなのでしょう？」

残り産を終え、床に横たわったままのメノワは、心配そうにヤヨスラを見上げた。

「ああ、とてもいい子だ。さすがは狼どもに魅入られただけのことはある。だが、この子の未来には人並み以上の困難が待ち受けているようだ。大丈夫、この子に耐えられるさ。おまえさんもできるだけこの子の傍にいてやっておくれ」

「ええ、ええ。もちろんですわ」

慈愛に満ちた瞳に淡い涙を浮かべ、つぶらな瞳を開いた赤子の髪

を撫でるメノワに黙したまま頷いたヤヨスラは、部屋の隅で腰を抜かしたようにへたり込んでいるオウルフを振り返った。

「さて。オウルフや、父親の仕事だよ。赤子の褥だ。さあ、これを持っておゆき」

「……あ。婆様はば、ポポリも。俺が戻るまで、メノワと娘を頼む」

ヤヨスラは残り産で出された赤子の褥を布でくるむと、オウルフに差し出した。

「すぐに戻って来る。もう苦しくはないか？」

「ええ……わたしの分まで、お祈りをお願いします」

微笑んだ妻の顔に頬を緩め、頷いて立ち上がったオウルフは仕切り幕を払いのけ、夜の帳が降りた草原へと姿を消した。

生まれたばかりの我が子の褥をくるんだ布を胸に抱き、灯りの零れる小さな産屋から出たオウルフは、脳裏に焼き付いた先程までの壮絶な出産に、思わずちいさく息を吐いた。暗雲の切れ間から差し込む夕陽に照らされた見事な朱色あけいろに染まる草原を眺め、足を踏み出そうとした彼は、一瞬、ギクリと動きを止め、小高い丘の上の黒い塊とその中に光る、一对の獣の瞳に強い視線を投げつけた。

「……それ以上近づけば、おまえの骸を吊すことになるぞ」

低く呟き、松明の灯りを頼りに獣の待つ丘へと向かうオウルフの耳に、遠く狼の遠吠えが響く。

丘の上に辿り着いたオウルフは、膝を折って草原に布のかたまりを置き、布を開いた。

「血の匂いだ……」大地に眠る深き力よ！ 草原の民、オウルフ・ユチより我が嬰兒の褥を汝らに捧ぐ。普く力を以て、我が娘、アヌ・ユカラの名と体に恩寵をもたらしたまえ！！」

狼の遠吠えが宵闇の気配へと変わりつつある草原に響く。草原に置かれた赤子の褥の前に、祈りを献げ、大地に口づけた後、彼はその場に立ち上がり、叫んだ。

「テングリよ！！ おまえはこれ待っていたのか！？」

一対の獣の瞳の光が消え、闇の中から白銀の被毛を纏った大きな雌の狼が現れた。闇の中に佇んでいるにも関わらず、妖しい輝きを纏うその美しい狼の姿に、オウルフは額に汗を滲ませた。

「さては、無事に産まれたか。それは重畳。皆、おまえの妻の苦しみが和らぎ、我等の稚き娘が、健やかに生まれいづるのを待っていた」

柔らかな女の声に、オウルフは弾けるように言葉を叩き付けた。

「嘘だ！ おまえらは俺を恨みながら関わりのない妻の命を奪おうとしているじゃないか！！ なぜ俺ではなく、妻の命を狙う！？」

オウルフの問いに、テングリは白く輝く尾をゆるりと揺らした。

「賞賛に目が眩み、軽率な行いで全てを手に入れたがる者ほど、手元にある唯一無二の者の姿は見えぬものだ。人間の身勝手な慰

みのためだけに、仔を身籠もった狼を追い詰め殺したおまえの罪は、同じくおまえの子種を身籠もった妻の命で贖って貰う。それだけのこと。それが大地に生きる全ての者の則であるう？」

薄く笑むような匂いを含ませたその声に、オウルフは全身全霊の力を込めて低く言葉を放った。

「そうか、ならば仕方ない。あの産屋に少しでも近づいてみる。俺がおまえ達のはらわたを切り裂いて、この草原をあのだ夕焼けよりも赤い血で染めてやる」

くすくすと笑い出したテングリは、一瞬のうちに女の人形ひとがたへと姿を変え、ゆつたりと腕を組んでオウルフの傍らに近づくと、草原に献げられた赤子の褥を静かに抱き上げた。

「……これはまた随分と無駄に若く、浅はかな狼だ。我々は自らの手は下さぬよ。おまえの妻の亡骸は、おまえが自らの手で我等のもとにいざなう事になるだろう。我が嬰兒の褥は確かに受け取った。おまえの娘は我等の娘　それを忘れるな」

松明の灯りを受け、微笑むテングリの姿を目にしたオウルフは愕然とした。

「おまえ、その顔は……メノウ!?　待て!　どういう意味だ!?　答えろ!　　テングリ!!」

凄まじい風が草原を吹き抜け、思わずよろけて身構えるオウルフが目を開けると、既にテングリの姿はなく、オウルフをあざ笑うかのように狼の遠吠えが遠く微かに響くばかりだった。

聞書 うまれいづる娘 参

産後の肥立ちが思わしくなく、産屋の床に伏せたきりのメノワは、外を賑わす馬車の音に気付いてゆっくりと目を開けた。

「奥さま、旦那さまと坊ちゃんがいらしたようですよ。見てきましたよう」

身の回りの世話にあたっていたポポリがメノワに声を掛け、産屋の天幕に手を掛けた途端、弾けるような声とともに、ちいさな塊が産屋の中に飛び込んで来た。

「マア！ マア！ どこ？ あっ！ マア！！」

まだ幼い少年は、メノワの声と姿を目にした途端、嬌声とともに傍に駆け寄り、布団に覆い被さるようにして母に飛びついた。

「エオ、マアはここよ……おっと。あらあら、元気なひとが来たわね？」

「エオね、良い子だったよ。だからポルの馬車に乗って来たの」

母の顔を覗き込み、再びぎゅっとメノワにしがみついた幼い息子の姿に、メノワは微笑んでエオの柔らかな髪を撫でた。

「うん。とっても良い子にしてるって、ポルがマアに教えてくれたわ、エオは偉いね。マアもエオに会えるまで、泣かないで良いマア

でいるように頑張ったわ」

ポポリに手伝って貰いながらメノワが布団の中から身を起こす間に、傍らに置かれた乳母籠をエオはじつと覗き込んだ。

「わあ、赤ちゃんだ。ちいちゃいねえ。僕の“いもつと”でしょう？ ポルが女の子だって言ってたよ？」

「そうよ。あなたの妹のアヌ・ユカラよ」

母の声に、エオは小さく首を傾げた。

「アヌ・ユカラ…… “夕焼けの詩”？」

息子の仕草に母は笑い、彼の頭を撫でた。

「ええ。あなたと同じお空から名前をいただいたのよ。いい名前でしょう？」

エオは母の布団の傍らにあぐらを掻いて座り込むと、乳母籠を覗き込み、手を伸ばして妹のアヌ・ユカラの頭を撫でた。

ポポリは母子の対面に安堵の表情を浮かべ、そつと席を外すと産屋から出て行った。

「ボクが昼間のお空で、ユカラが夕方のお空だね？」

「ええ。あなたは“蒼天”ね。あなたが生まれた時、草原の上にはとてもきれいな青空が広がっていたのよ。マアが抱っこしたあなたの瞳には、深く澄んだ青空が映っていた……本当に、きれいだっただわ」

手のひらで何度もエオの赤い頬を撫でる、少し疲れたような母の様子に、エオが心配そうに尋ねた。

「マア？ まだ病気なの？ ポルが都から薬草を持ってきたからね。飲んで早く元気になったら……あ、ポル！」

エオが振り返った産屋の入り口からオウルフが姿を現し、エオの隣にあぐらを掻いて乳母籠の中を覗き込んだ後、メノワの頬に指先を伸ばした。

「今日は随分と顔色が良いな。具合はどうだ？」

「ええ。なんだか今日はとってもいいの。もうすぐ起きられるかしら」

微笑んだメノワの様子に、オウルフは頷いてエオの頭を撫でた。

「無理するな。しばらくの間ここでゆっくりするといい」

「ごめんなさい。家のことは大丈夫？」

「マア、早く帰ってきて。お家の中がぐちゃぐちゃだよ」

エオの情けない声に、一同は笑い声を上げた。

オウルフにうながされたメノワは再び床につくと、産屋の天幕を見上げ、ふわりと微笑んで話し始めた。

「あなた……わたしね、この子をお腹に授かったばかりの頃に……夢を見たの。産まれたばかりのちいさな赤ちゃん

を抱いて、草原に立っていたわ……可愛い女の子よ。わたしの前には……たくさんの狼が集まっていた。その中に一匹だけ真っ白な狼がいて……とてもきれいな、雪のように白く輝く毛並みを持つ美しい狼だった。その狼が言うの……自分達の娘を、返して貰いに来たって」

「白い……狼!？」

ハツとしたようにメノワの顔をみつめるオウルフに、ぼんやりとした瞳で天井を見上げていたメノワは、オウルフの顔を眺めて微笑んだ。

「そう言われた時……腕に抱いたその子が、とてもとても遠いところに行ってしまうような気がして、思わずぎゅっと抱き締めたの。とても柔らかくて温かった。初めてエオを抱き上げた時のことを……思い出したわ。

わたしね……この子はわたしの、人間の子として生まれてくるから、あなたたちには渡せないって言い張ったの。そうしたら、白い狼がそれは違うって言うの」

「違う……?」

オウルフの言葉にメノワはちいさく頷いた。彼がメノワの手を取り両手で包み込むと、メノワは息切れしたように微かに息をついた。

「もう喋るな。少し眠ったほうがいい」

「いいえ、いいの。大丈夫よ。今話しておかないと……わたし、忘れてしまいそうで」

息を整えたメノウは、オウルフの顔を見上げた。

「その子は自分たちの娘として産まれるはずだった仔”だって。その子を抱いているわたしに……白い狼が近づいてきて、大切な娘だから見失わないようにと、名前を授けてくれたわ……・・・ “ユカラ”と、必ずそう名付けなさいって。

良い名前でしょう？ ユカラ…… “叙事詩”よ。きっと素敵な女性になるわ。あの狼たちもこの子の誕生を待っていると言ってくれたから……わたしも、もっと……頑張らなくちゃね……」

メノウは産屋の天幕を見上げて微笑み、ちいさく息をついて瞳を閉じた。

間もなく、どことなく妻の様子がおかしいことに気づいたオウルフは、頬を強張らせて身を乗り出した。

「おい……メノウ？ メノウ！？ おい！！ しつかりしろ！！ ポポリ！ ポポリ！！ 来てくれ！！ メノウが！！」

オウルフの叫び声に、薬湯を手にしたポポリが飛び込んで来た。息を失い、ぐったりとしているメノウの様子に慌てて屈み込み、脈や呼吸を調べていたポポリは両手で口元を覆い、悲鳴混じりの声をあげた。

「奥様！？ 奥様！！ そんな……起きて下さい！！ 奥様！！」

「メノウ！ ……目を、開けてくれ……！！」

オウルフとポポリは、必死にメノウの名を呼び続け、やがてその

場で泣き崩れたポポリを、エオは不思議そうに見つめて首を傾げた。

「ポル？ マアはどうしたの？ 寝ちゃったの？」

「……………」

「ねえ、ポル？ マアはさ、もっとたくさん薬草を飲めば治って起きるんじゃないかなあ？」

母の骸の傍らで無邪気にニコニコと笑顔を向けるエオの姿に、オウルフは大粒の涙を零しながら息子の頭を撫でた。

「エオ……………マアは……………狼達のところに旅立たなきゃならなくなっただよ……………ポポリ、すまないが婆様を呼んで来てくれ」

エオの問いに堪えきれず嗚咽を漏らしたポポリは、肩に置かれたオウルフの手に何度も頷き、前掛けで目許を押さえながら顔を上げた。

「……………う……………う……………わかりました。ああ……………今朝は随分お元気なご様子でしたのに、まさかこんな事になるなんて……………母もきつと悲しむでしょう……………それでは、行って参ります。坊ちゃん、ポポリが出掛けている間、ポルと一緒にマアを守っていてくださいね」

「うん。ボク、ここにずっといるよ。ポポリも気をつけてね」

「ええ、ええ……………う……………」

工才の無邪気な様子に、ポポリは泣きながら産屋を後にした。馬車の動き出す音とともに、静かに眠っていたユカラが突然火が付いたように激しく泣き始めた。

その声を聴きながら、堪えきれずメノワの前で膝折れ、号泣し始めたオウルフは、乳母籠から激しく泣き続けるユカラを抱き上げると、母を失った嬰兒に為す術もなく、せめてもと我が子をあやしなから産屋の中を歩き回っていた。

聞書 うまれいづる娘 肆

草原を漂う朝靄の中、死者を弔う鐘の音が響く。

ヤヨスラを先頭に、メノワの亡骸を乗せた荷車を牽くオウルフ、乳母布にくるまれポポリに抱かれたユカラ、ポポリと手を繋いで歩くエオの姿が現れた。

ヤヨスラの鳴らす鐘の音は白く煙る草原の丘に染み渡り、やがて一行が丘の上に辿り着くと、オウルフは無言のまま、地面に妻を埋葬する穴を掘り始めた。

「さあ、おいで。子ども達。婆ばあがお話をしてあげような」

ヤヨスラの招く声に、ちいさな花を手にしたエオは首を傾げた。

「お話？ でも、ユカラはまだちいちゃいから、婆様のお話がわからないんじゃない？」

「それなら、この婆のお話をエオがユカラの分もちゃあんと憶えておいで。ユカラが大きくなったら、エオがお話をしてあげな。できるかね？」

「うん。わかった」

こくりと頷くエオを抱き寄せたヤヨスラは、皺だらけの手でその幼い手を握った。

「エオのマアさまはな、大地のもとに還りなさることになった。今、

そなたのポルさまは、マアさまが大地の精霊達のところの旅立たれる大きな穴を掘っておる。これからは、この広い草原全てがエオのマアさまだ。わかるかな？」

「マアは、寝てるんでしよう？ 穴に入って、いなくなっちゃおう？ もうマアには、会えないの？」

荷台に横たわるメノワの亡骸を眺めながら首を傾げるエオに、ポポリは涙を堪えながら腕の中で静かに眠り続けるユカラをあやした。オウルフが墓を掘り続ける音とともに、ヤヨスラは再び静かに言葉が続けた。

「エオ。マアさまはな、この草原とわたしたちを護っておられる、テングリのところに行くんだよ。テングリは真つ白な姿をした女の狼だ。マアさまはユカラを産む時、テングリとひとつ約束をした。マアさまがいなくなったら、代わりにエオとユカラを、テングリが護ってくれるように。この草原は、テングリの大きな力が働いておるからな。」

エオとユカラはずっとおまえ達のポルさまと一緒に、この草原で暮らすといい。この草原が続く限り、テングリとマアさまはおまえ達と一緒にいる。おまえ達が行くところには、必ずマアさまもいる。寂しくはないだろう？」

「うん。ボクが行くところには、いつもマアがいるんだよね？」

「そうだ。この婆も、エオも、ユカラも、ポルも、ポポリだっていつかはみんな、テングリのところに行くのさ」

「ボクもいつか、大きな穴を掘るんだね？」

確かめるように問いかけるエオの姿にヤヨスラは頷くと、落ちくぼんだ瞳で朝靄の彼方まで続く草原を遠く見遣った。

「ああ。みんなみんな、いつか大きな穴を掘って大地の中に還っていくんだ」

「ふ〜ん……………？　こんなにちいちゃいユカラも？」

続くエオの声に、ヤヨスラはちいさく笑って頷いた。

「そうだな。ユカラが婆のように、しわくちやになったらな」

「ええー！？　ユカラも婆様のようになるの？　ポポリも？」

皺だらけのヤヨスラの顔や手と、ユカラの丸いちいさな手を見比べ、エオが瞳を丸くした。ヤヨスラは笑い出し、涙を零していたポポリもエオの様子に泣き笑いをした。

「ええ、そうですよ。坊ちゃんもいつか、しわくちやのおじいさんになりますからね。その時に、ご自分の手を見てびっくりしないでくださいね」

「ねえ？　ボクがしわくちやのおじいさんでも、マアはわかってくれるかなあ？」

自分の両手を穴の空くほど見つめていたエオは、ヤヨスラの顔を見上げた。

「わかるともさ。エオはマアさまにそっくりもそっくり、瓜ふたつだからな。しわくちやの爺じいばかりいても、マアさまならきつとすぐ

にわかりなさるぞ」

「へ〜。しわくちゃのおじいさんばっかりいたら、面白いね」

感心したように頷くエオに、一同から笑い声が零れた。

やがてオウルフが掘る穴は大きな口を開け、メノワの埋葬の支度が整った。

大地に還る魂を送るクニノウタの一節とともに、メノワの骸は土中に憩い、丘の上に小高く盛られた土の山には墓標として立てられた弔いの旗が風に揺れた。

ヤヨスラの弔いの歌とともに、一同が首を垂れる。

天地を結ぶ依り代となり、あまね普く精霊の加護の許、ふたたび巡り見えん事を。まみ

最後の一節を歌い終えたヤヨスラは草原に頭をつき、口づけると一握の土を懐から取り出した袋に収めた。

「……さて、これでメノワは無事にテングリのもとに向かえるだろう。オウルフよ、これからおまえさんはメノワの忘れ形見を育ててゆかねばならんだろうし、どうかね？ このまま遊牧の暮らしをするよりも、ユカラが大きくなるまで一度、都に戻っては。メノワを亡くした草原に、このまま留まり続けるのは辛かるう？」

メノワを守るように風に揺れる弔いの旗をじっと見つめ、黙っていたオウルフは、ヤヨスラの言葉に力なく目蓋をしばたかせた。

「婆様……俺は、メノワとテングリの傍にいらなくてはならない気がする。例えば都に戻っても、またすぐにここに戻って来てし

まうのではないだろうか？」

苦痛に満ちたオウルフの顔をじっと眺めたヤヨスラは、傍らに立つエオの頭にそっと手を置いた。

「テングリとメノワの宿るこの草原がおまえを呼び続けるなら、そうするがいいだろうよ。ユカラは姿かたちは人間だが、狼どもの子でもあるからな」

「メノワは俺を赦してくれるだろうか……？　もし……もし……もし狼達がやってきてメノワの眠るこの墓を暴き、身を喰らう事にでもなれば……俺はあいつらを、地の果てまで追って根絶やしにした挙げ句、狂ってしまうんじゃないかと……不安なんだ」

エオの手を引き、彼とともに墓の前に花を供えたヤヨスラは言葉を続けた。

「メノワの心残りには、なんといてもおまえさんとメノワの間に生まれたこの子達だよ。この子達を立派な草原の民に育てることが、あなたがメノワの苦しみを救える唯一の道だ。大丈夫だ。狼の名を持つ者を、テングリは見捨てたりはしなさんよ」

オウルフはポポリの腕からユカラを抱き上げ、エオの前にしゃがみ込んだ。

「エオ。これからはポルとエオが、ユカラのマアになるんだ」

「マアに？　ボクもポルも男でしょ？　マアは女だよ？」

驚いたように瞳を丸くした幼い息子の姿に、オウルフは頷いた。

「ユカラはまだうんとちいさいから、マアが必要なんだ。だけどポルだけじゃ、ユカラのマアになるのはとっても大変なんだ。だからエオもポルと一緒に、ふたりでユカラのマアになろう。いいかい？」

「三人でしょう？ ユカラのマアは、メノワマアさまと、ポルと、ボクだよ。マアは白い女の狼のテングリと一緒に、ボク達をここで見ていてくれる。だから大丈夫だよ。ねえ、ユカラ」

朝靄の晴れた草原には、エオの名に由来する蒼天が広がっていた。草原を渡る風に揺られ、たなびく数多あまたの旗のもとに立つ父と子と、その子護りの巫女姫達は、メノワの息吹が大地の精霊と狼達のもとに旅立ち、魂の安寧を得ることをいつまでも祈り続けていた。

其ノ玖**非番の日

「すみません、乗せて貰っちゃって」

「なあに、先生のひとりやふたり、どうってことねえ。今日の先生は、また何だかいろいろと持っていていなさるが、どちらまで行かれるんですか？」

「ああ、大門からは出ません。ポロチセ館に届け物に行くんですよ」

わたしの言葉に、手綱を繰るユチさんが納得したように声をあげた。

「あーあ、御巫のお姫さん達のところですかー。先生はお若いし、そりゃあ姫さん方にはモテるでしょうなあ」

「いやあ、なんだか行くたびに頼まれごとばかりで。旦那衆として行くなら、そりゃあ夢みたいなところですけどねえ。はは」

ずっしりと重たい荷を膝の上に抱え、わたしは偶然出会った刀鍛冶のユチさんの馬車に揺られ、大門に向かっていった。

聞けば、ユチさんはこれから広い草原を回って、放牧に出ている民の馬の蹄に蹄鉄を打ちに行くのだという。

刀鍛冶が蹄鉄屋を兼ねるのも妙な話なのかも知れないが、鉄を扱うという点においては何でもやるのがユチさんのやり方なのだそうだ。この馬車で草原中を回り、遊牧をしている民の馬の蹄を打ち、

また別の集団のもとに出向いて行くのだという。

「かみさんが生きてれば、この子らは都に残して行くところなんですけどねえ。まだふたりともチビ助ですが、連れて行けば多少の手伝い位はできるでしょうから」

「え………？ ユカラちゃんも連れて行くんですか？」

「ええ、一緒に連れて行きますよ」

驚いたわたしにユチさんは目尻に刻まれたしわを寄せ、笑った。

「ユカラだけを都に残して、この子らを引き離すのもなんだし、糸紡ぎ程度ならできるんでね。もともとは近所の奥さん方に仕込んで貰ったもんだが、目が見えなくても、家仕事でできる事はたくさんあるんで、まあやれることだけでもやらしてみようかと思ってますよ。」

これでも結構、器用なもんでね、わたしよりもかみさんの方に似たんでしょう。わたしとエオの男手で育ててるもんで、がさつで荒っぽい娘になるんじゃないかねえかと心配でしたが、おかげさんで今じゃ病気ひとつしねえ、自慢の娘ですよ。はは」

「ユチ兄ちゃん、ユカラはね、糸紡ぎが上手なんだよー。ボクがやると太かったり細かったりなんだけど、ユカラはずっと真っ直ぐに紡ぐことができるんだ。ボクらに糸紡ぎを教えてくれたおばさんも褒めてた」

「ほめてたー」

馬車の荷台に積んだ家財道具の上に座っている兄のエオくんが、

ニコニコとユカラちゃんの頭を撫でる。ユカラちゃんは膝に抱いたちいさな人形の頭を同じように撫でていた。

妹が欲しいと言っていたユカラちゃん。今では亡くなった母親が作ってくれたという、その人形が妹代わりなのだという。

わたしの“子護り”としての役目はとうに終わっているのだが、なんとなく気になって、その後もこの少女の様子は時々見に行くようにしていた。

九歳のエオくと、七歳のユカラちゃん。多少、出てくる言葉の少なさはあるが、ユカラちゃんは他人の言葉はきちんと理解できている。ユカラちゃんにも七還暦生まれの者が持つ能力があり、彼女の場合は、次代の巫かんなきになるのではないかと噂されている程、未来を予見する力が強いのだそうだ。

もしかすると、ユカラちゃんもいずれはレスイちゃんのように、今わたしが向かっているポロチセ館の奥館で暮らす事になるのかも知れない。

ちなみに、この国の歳の数え方は生まれた時で一歳になり、その後、新還暦を迎えた日に国民は皆、ひとつ歳を取ることになる。皆さんでいうところの『数え年』と同じ仕組みだ。

成人と呼ばれるのが十九歳で、ちょうど、わたしの上司であるクオル尉官とこの国の王子殿下は、おふたりとも現還暦で御成人のお歳を迎えられた。

わたしはといえば、とつくに成人年齢を超え、更に歳を喰っている。今は二十八歳。上司のクオル尉官の十九歳というお歳を思えば、お城に仕える見習い書記官としては、かなりのいい歳だということがお解りいただけるかと思う。

更に、ユカラちゃんとは三回りも歳が違ふことになる。わたしの友人の中には、もうそのくらいの子を持つ者もいるので、親子といつても不思議ではないのかも知れない。

ちなみに我が妹は二十二歳。もうそろそろ結婚してもおかしくはない歳なのだが、どうも今のところそんな気配はないらしい。

幾度か、友人なのか恋人なのか、なんなのか。という者がいたこともあるようだったが、その辺りについては例え兄妹とはいえ、口にしない方が家庭とわたしの心の平穩が保てるため、口出しはしないことに決めている。触らぬ妹の恋路にわたしの平穩あり。だ。

「先生、そろそろ着きますが、ポロチセ館の前まで行きますかい？」

「あ、ああ。いえいえ。もうこの辺りで充分です。ありがとう、荷物もあつたので助かりました。都に戻られるのは、いつですか？」

「サクラ緑陽の櫛羅様のお祭りまでには戻りますよ。なんでも、ユカラも橋渡りに加えていただけるとさうぞうで」

「へえ、大役じゃないですか。すごいなあ」

ユカラちゃんは美しい瞳をキラキラと輝かせ、ニツコリと笑った。

やがて馬車は大門の傍に近づき、わたしは馬車を降りてユチさんと兄妹に手を振って礼を言い、大門を出て草原へ去り行く馬車を見送ると、レスイちゃん達の暮らすポロチセ館へと足を向けた。

其ノ拾**ポロチセ館

ポロチセ館の入り口に向かって歩いてみると、館の中からひとりの女性がちいさな手桶と柄杓を持って、出てくるのが見えた。

長い髪をきれいに結び上げ、衣の袖を帯に挟んで土埃の舞う道に水を撒き始める。

館の入り口脇の木製の長椅子には数名の男が座り、水を撒く女性の姿にチラチラと視線を遣りながら、館の中に案内されるのを待っている。やがてひとりの男が腰を上げ、その女性に話し掛けようとした瞬間、女性はわたしの姿に気がついて声をあげた。

「あら、旦那センセ！ 来てくださったのね、嬉しいわ」

女性の背後で声を掛けそびれた男からの、ジロリと睨み付けるような視線をまともに受け、わたしは思わずその場に立ち止まってしまった。

「センセ？ ……あら、旦那さま方、そんな怖い顔をなさらないでくださいませ。お疲れでしょうけど、もう少しだけお待ちになって？」

わたしの様子に首を傾げ、背後を振り返った女性はニッコリと男達に微笑みを向けると扉の脇に手桶と柄杓を置き、わたしの方に小走りに駆け寄って来た。

「おいでなさいませ、旦那センセ。皆、お待ちしましたのよ」

誰から見ても明らかかな商売上の言葉とはいえ、見ているだけで思わずウツトリしてしまうような、きれいな微笑みをまともに受けたわたしは、慌ててあらゆる方向に目を泳がせながら、口の中でモゴモゴと呟いた。

「あ、ああ。いやいや……その、今日はレスイちゃんと……あと、これ。皆さんに。どうぞ使ってください」

「んもう。旦那センセったら、あたし達にはお土産ばかりでいつも逃げてばかり。またこっそりと、上手にお帰りになられるおつもりなんでしょう?」

「そ、そんなことは……」

「ダメよ、センセ。今日こそは帰しませんからね? たまにはちゃんと遊んでいていただかなくちゃ」

いたずらっぽい微笑みで軽く睨まれ、さあさあどうぞ。お入りになつて。と、女性はわたしの腕を引くように店の中へと案内してくれた。

皆さんに誤解のないように説明すると、これは決してわたしがモテているという訳ではない。彼女たちは皆、このポロチセ館を訪れる客に対して同様の態度で迎えてくれるものなのだ。

この館は、下働きの者から帳場、飯場、宴場、酒場、それから宿場で客の閨の相手を勤める娼姫に至るまで、全て女性のみで賄われている。簡単に言えば、居酒屋と宿屋の複合施設のような館であり、彼女達は酒場と宿を営みながら、その奥に構えられた館とそこに住

まう者達を守っているのだ。

そう。ポロチセ館は、表向きは酒場と娼館、その奥にはこの国を護る神獣『櫛羅』に仕える巫女姫たちの暮らす祈祷楼、というひとの心の拠り所としての二面性を持つ建物だ。ちなみに、ポロチセという言葉には、赤子が衣の上に纏う、ちよつと皆さんで言うところの『おくるみ』という意味がある。

女性を女性が守り、不特定多数の男たちと閨を共にする娼姫が、神に仕える巫女姫を守る。一見、相反する取り合わせのようにも思えるが、人々の身体を癒し、活力を与える酒場や娼館と、人々の心を癒し、救いをもたらす祈祷楼の役割には相通じるものがある。

他国では巫女と娼婦を同じ場所に置くなどと、考えられないことなのだそうだが、この国の、遊牧の民を祖とするわたし達にとつて、女性は命を生み出し、仲間の絆を高める大切な宝だという古来からの価値観から、巫女と娼婦を同等に扱うことは、至極当然のものとして皆に受けとめられているのだ。

いつだったか、わたしの馴染みの娼姫が閨の枕話の中で、もともとポロチセ館の仕組みは、長年に渡りこの国の祭事を取り纏める『巫』を勤める御方の発案がもとになっているのだと、笑いながら話してくれたことがある。

わたしもごく普通の男だ。この館に顔を出し、美しい女性たちに囲まれていれば、それなりに馴染みの娼姫ができてくる。妹もそれは知っていて、たまに自分でも顔を出し、娼姫たちのことを“お姐さん”と呼んでは、可愛がられているようだった。

ちなみに、巫女も娼婦は国の違いに関わらず『お姐さん』という

愛称で呼ばれる事が多い。正式な呼び名は“巫女姫”“娼姫”という。

それに対し、ポロチセ館を訪れる客は全て『旦那さま』もしくは『旦那衆』と呼ばれる。男女の別を問わずそう呼ばれることから、面白がって何度もこの館を訪れるうちに、いつの間にか特定の娼姫と身体馴染みになってしまい、果てには男性と同じように、娼姫を自分の家族として身請けし、ともに暮らすようになる女性たちもいるのだという。

ポロチセ館の娼姫たちは、基本的にこの国の生まれではない。これはこの国で彼女たちがこの職業に就いている理由のひとつでもあるのだが、その辺りのことについては、後ほど話すことにしよう。

其ノ拾巻**ポロチセ館

ちょうど、昼飯時の店の中は、他国へと旅立つ前に腹ごしらえをする者や、遠くから旅をして来た者などで賑わっていた。

衣をたすき掛けにした少女達が膳を手に、卓に着いている客と飯場の間を往き来する中、先程の女性の案内で、店の奥から廊下づたいに角を曲がろうとしていたわたしは、足下にうずくまっていた、ちいさなかたまりに蹴躓きそうになった。

「・・・・・・・・うわっ!？」

「まあ! 大丈夫ですか、旦那センセ?」

「こゝら、ヒノちゃん。こんなところまで出てきちゃ危ないですよ? さ、ノイエマアと一緒にいきましょうね。」

「うー。」

廊下に座り込んでいたのは、小花の柄をあしらわれた衣を纏う女の赤子だった。

「ヒノちゃん、と呼ばれ、女性に抱き上げられた赤子は、わたしの顔をじっと見てすぐに、くるり。と、そっぽを向いてしまった。」

「やあうー。ぶ〜。」

そのまま女性の肩に顔を埋めてしまったヒノちゃんに、女性ノイエさんとわたしは、顔を見合わせてちいさくふきだし、ノイエ

さんは笑いながらヒノちゃんをあやすように身体を軽く揺らした。

「あら、ヒノちゃん忘れちゃったの？ 旦那センチでしよう？」

「はは。いつもきれいなマア達に囲まれているのに、ろくに顔も出さない男の顔なんか見ても、ヒノちゃんのご機嫌を損ねるだけです。よ。へえ、この間ようやく掴まり立ちするようになったと思ったら、もうこんな遠いところまでひとり出て来るようになったんですね。大したもんだなあ」

「そうなのよ。もうちょっとでも目を離すとお店に行きたがって。やっぱり渡りに柵でもつけないとダメかしらねえ？」

娼館に赤子がいるのも妙な話だが、この赤子は娼館と棟続きの祈禱楼で生まれた赤子なのだ。つまり、この子の母は、この音の国の神獣『櫛羅』に仕える巫女姫である。

神に仕え、救いを請う民に道を拓く巫女姫達は大抵、婚姻を結ばない。つまり、この赤子、ヒノちゃんも父親が誰なのかは明かされていない。というのも、ポロチセ館を訪れ、巫女を通じて櫛羅の神託を請い願う者の中でも、巫女と直接まみえることが叶うのは、深く心に傷を受けながらも再生への祈りを抱えたごく限られた者のみと、この国の『巫』によって決められているからだ。

娼姫達の判断により巫女の前までいざなわれた者は、しばらくの間、巫女とその者ふたりきりで生活を送ることになる。その中で、日常生活において対外的に使われる“隠し名”に、親から授けられた“魂名”を併せた、自身の生きる源である“然り名”を巫女に明かし、神託を受けた巫女から施される回復の導きによって、これまでの名とは決別し、新たな名を授かる者、傷を癒し、他国へと向か

う者と、様々な道を自らの力で拓いていく力を持つようになる。

巫女は神獣『櫛羅』に仕える身であり、男女の別を問わず、いわゆる世俗の人間と、肉欲を目的として身体を交えることは叶わないが、巫女が必要と判断した者については、肌を合わせ、巫女の中を“泳ぐ”櫛羅とのより深い心身の交感が行われることがある。つまり、巫女が民と交接する目的は、肉欲のためではなく、自らの身体を通じて櫛羅のもとへ迷える民をいざなうためなのだ。

その際、男の子種を殺すための練り膏を使うことはできないため、結果としてレスイちゃんのように、時として巫女が肌を合わせた男の赤子を身籠もることがある。

巫女の元へといざなわれる者たちは密やかに祈祷楼に入り、また出てゆく決まりであり、一度、巫女の導きにより祈祷楼を出た者が再びこの場に戻ることは叶わないため、自分の子を身籠もり、またポロチセ館の中で産み育てられていることを、父親である男ですら生涯知り得ない場合がほとんどだった。

巫女の産んだ子は櫛羅からの授かり子と呼ばれ、肌や髪の色にこだわることなく、皆、同還暦生まれのきょうだいとして育てられる。養母はポロチセ館の娼姫達だ。

そんな曰くを持ち、男性が滅多に立ち入ることのない祈祷楼にわたしは向かっているのだが、それはわたしがレスイちゃんの幼馴染みであり、わたし自身がこの祈祷楼で生を受けたせいでもある。つまり、今は亡きわたしの母は、ポロチセ館の巫女の身分にあった女性で、亡くなった父とわたしには血の繋がりが無い。ちなみに我が妹は、父母双方と血が繋がっていて、わたしとは異父兄妹ということになる。

わたしと妹の性格がほぼ真逆に近いのは、父母が同じ兄妹でもあり得ることなので、我が妹の、竹をまつぶたつに割ったようなあの性格は、やはり血の繋がり云々と言うよりも、わたしを常々守り、世話を焼きながら成長した長年の蓄積によるものが大きいのかも知れない。

つい先程、巫女は婚姻を結ばない場合がほとんどだと、皆さんにお話をしたばかりだが、ごくたまに、わたしの母のように巫女の座を降り祈祷楼を出て、一般の民である男と婚姻を結ぶ場合もあるのだ。

祈祷楼で生を受けたわたしは実の父を知らないが、それでも父と母が婚姻を結んだのは、わたしがまだ母のお腹に留まっていた頃のこと、亡くなった父は、血縁のないわたしを実の息子として、それはそれは可愛がってくれた。

そもそも広い草原で暮らしてきた遊牧民は昔から皆、自分達の部族の頭数を守るために、女性を宝とし、奪い合ってきた歴史がある。大切なのは血縁のある親子関係ではなく、部族としての絆だった。

そんな背景もあり、巫女でも娼姫でもない我が妹は、主に男性が通うポロチセ館にも躊躇なく足を運び、娼姫が主催する楽や歌の集いにもよく顔を出している。

母やわたしにとって、ポロチセ館が皆さんでいうところの「実家」のような存在であるように、我が妹にとっても、この館が心を寄せる温かな存在であるということは、わたしにとっても嬉しいと思えることのひとつだった。

其ノ拾貳**ポロチセ館

ヒノちゃんをあやすノイエさんの先導で、わたしはポロチセ館の奥に構えられた祈祷楼の入り口に近づいた。

「ヒノちゃんも大きくなつたわねえ。この子ったら、いつの間にか随分重たくなつちゃって」

上機嫌で腕の中でぴんぴんと足を伸ばし身体を弾ませているヒノちゃんをノイエさんが笑いながら抱きかかえ直していると、行く手からはたばたと軽い足音が響き、間もなくふたりの少女が現れた。

「娼嬌様ウチヤウチヤウ！ 申し訳ありません。またヒノちゃんが脱走しちゃって……」

「あつ！」

あゝう。マアアー。

ふたりの少女の姿を目にした途端、ノイエさんの腕のヒノちゃんは、ふたりの少女に向かってもみじのようにちいさな手のひらを差し出した。

「やっぱり娼嬌様のところに行っちゃったんですね。この子ったら」

「もう、ダメでしょー？ あなたのマアはわたし達なのよー？？」

頬をふくらませてノイエさんからヒノちゃんを受け取った巫女姿のふたりの少女は、わたしの姿に気づくと慌てて廊下に膝をついた。

「おいでなさいませ、旦那様」

「お騒がせして申し訳ありません」

「あ、い、いや。わたしはお客さんじゃないからそんなに頭を下げないで。きみ達は、新しい巫女姫さんかい？」

「はい。半季前から、こちらの巫女姫様方のお世話をさせていただいています」

「でも、まだどちらの楼にお仕えするかは決まっていないんです」

「あら、そういうえば旦那センセとは初めてのご対面だったわね。ふたりとも縁あって、こちらに来て貰っている子達なんですよ。よく働いてくれるし、ヒノちゃんのお世話も上手なのよね？」

ニコニコと微笑むノイエさんの言葉に、ふたりの少女は恥ずかしそうに顔を見合わせた。

「あ、あの。どうぞ、ごゆっくりお過ごしくださいませ」

「ありがとう。ヒノちゃんをお願いね」

「はい！」

ふたりの言葉にノイエさんは頷き、ふたりの少女はその場でぺこりとお辞儀をして立ち上がると、ヒノちゃんを連れて祈祷楼の中へ

と入って行った。

「あの子たちにももう、帰るところがないんですよ。この国に辿り着いた時はふたりとも口もきけないような状態で……旦那センセ、宜しかったら後でお茶の相手にでも、あの子達を呼んであげて下さいな」

「ええ。いいですよ。こんなおじさんが話し相手で、楽しいかどうか分かりませんけど」

「まあ、またそんなこと言って」

ノイエさんは楽しそうにくすくすと笑うと、渡り廊下の突き当たりに構えられた、ちいさな朱塗りの扉を叩いた。

「レスイちゃんに、旦那センセがおみえになられましたよ」

はい、ただいま。

どこか遠くでちいさく鈴の音が鳴り、衣擦れの音が近づいてきて、静かに両開きの扉が開いた。

「お待ちしておりました。どうぞ」

扉の向こうには、いつもレスイちゃんの身の回りの世話をしている少女が現れ、ノイエさんとわたしに一礼すると、静かな所作で先に立って歩き始めた。

「旦那センセ、レスイちゃんのこと、お願いしますね」

「ええ。それじゃ、また後で」

わたしはノイエさんに軽く挨拶をし、レスイちゃんのいる祈祷楼の一室に向けて足を踏み出した。

「その後、レスイちゃんの調子はどうだい？」

「それが……あの」

わたしの先導をしてくれている少女はその場で立ち止まると、わたしの顔をじっと見上げた。

「巫女姫さま、三日ほど前に御寝所で転ばれまして」

「え!？」

「……いえ! あの、立ち上がろうとなされた時に、敷き布に脚を取られてお膝とお手を付かれたんです。そのまましばらく動けなくなってしまって。でも、巫女姫さまが大丈夫だから、旦那センセには言わないで欲しいと申されまして……」

「今のレスイちゃんの様子は？」

「ええ、安静になさっておいんです。お歩きになるのは控えておいんですけど、食欲もありですし、夜もよくお休みになられています」

レスイちゃんの様子は、当然ノイエさんも知っているはずだった。わたしになにも言わなかったのは、ノイエさんからみても心配なか

「ったからなのだろうか？」

「酷く転んだ様子ではないとは聞いても、実際にレスイちゃんの様子を診てみないことには心配だった。ことと次第によっては。」

「ウルちゃん」

廊下の突き当たりに、レスイちゃんが立っていた。

「顔色は良さそうだったが、わたしは思わず早足になってレスイちゃんに近づいた。」

「転んじやったの？　すぐにボクを呼んでくれたら良かったのに」

「……………うん。でも……………大丈夫」

「よほどわたしの顔が強張っていたのだろう。レスイちゃんはそつとわたしの手を取ると、自分のお腹に触れさせた。」

「眩しい輝きをレスイちゃんの胎内に感じ、それどころか、ちいさな変化が起こっていることに思わず息を詰め、ホツと小さく息をつくと、レスイちゃんの背をうながして部屋の中へと入った。」

「ボクがお城でお勤めしているから、気を遣ってくれたの？」

「……………ルニちゃん、すごく喜んでたし、ウルちゃん、大変だから……………」

「ポロチセの巫女姫様のためだもの。お城の仕事はボクじゃなくてもできるんだよ？」

「ルニ。というのは我が妹の名だ。この間、我が家を訪ねて来てくれた時の妹の様子を思い出したのか、レスイちゃんは自分のお腹を」

撫でてふわりと笑った。

「ルニちゃんみたいな、女の子だと……いいな」

「はは。じゃあ、ウルちゃんみたいな男の子は嫌かい？」

「え……うん」

頬を赤く染めて首を横に振るレスイちゃんの姿に、わたしは笑ってレスイちゃんの手を取ると、ゆっくりと長椅子に座らせた。

「レスイちゃんが転んだって、今さっき聞いたからびっくりした」

「うん」

「じゃあ、お礼にボクも、レスイちゃんをびっくりさせてあげるね」

「……びっくり？」

興味を惹かれたのか、レスイちゃんは無意識にお腹を撫でながらわたしに期待するような笑顔を見せた。

「レスイちゃんのお腹の子、逆子がちゃんと直ってるよ」

「……え？」

「きつと、レスイちゃんが躓いた時に、赤ちゃんもびっくりしたんだね。お腹の中で上手に回って、ボクが診る限りへその緒も首には巻いていないみたいだから、もう大丈夫。あとはもう、ボクにできることはあんまりないし、レスイちゃんも今までどおり、転ばない

よつに気をつけてね？」

「……………ウルちゃん、もうここに来ないの？」

心細そうな顔をわたしに向けたレスイちゃんに、わたしはゆつくりと首を横に振った。

「ううん。そんなことないよ。ボクはレスイちゃんの子護りだからね。あ、でもあんまりウロウロしたら、娼嬢さまに叱られるかも知れないなあ」

「まあ、わたしは旦那センセにはそんなに怖い娼嬢なのかしら？」

「え！？……………あ、いや。その、お、お店の方はいいんですか？」

突然聞こえたノイエさんの声に縮みあがったわたしが、慌てて背後を振り返ると、先程のふたりの巫女姫見習いの少女を伴ったノイエさんが立っていた。

「旦那センセをレスイちゃんの独り占めだなんて、もったいないからお邪魔しに来ましたの。ご一緒させていただいても宜しいかしら？」

この館は、娼嬢ウチヤウと呼ばれているノイエさんが一切を取り仕切っている場所なのだ。それにわたしには断る理由など、これっぽっちもありませんでした。

「ええ。もちろんです。どつどつどつどつどつどつ」

「あら、旦那センセは大切なお客様なんですから、どうぞそのままお座りになっていらして」

この館で一番身分の高い娼婦であるノイエさんに席を譲ろうと立ち上がり掛けたわたしに、ノイエさんは笑って、連れの巫女姫見習いの少女と共に静かに座った。

「産み月間近の巫女姫様が、転ばれたと聞いた時は本当に血の気が引きましたの。幸いその後もお加減が悪くなるご様子もなく、本当に良かったわ」

恥ずかしそうに頬を染めうつむいたレスイちゃんの傍らで、わたしは良い知らせをノイエさんに報告した。

「はは。なにより一番の心配の種がなくなりましたからねえ。躓いた拍子に赤子も驚いたんでしょう。逆子が直っています」

「まあ！ 本当ですか？」

ノイエさんは瞳を丸くしてレスイちゃんを見つめた後、手で口元に触れながら微笑んだ。

「うふふ、普段から物静かなレスイちゃんだもの。お腹の中でびっくりしたのかしら？」

「もともと元気な子ですから、わたしがうまく切っ掛けを作っただけなら良かったんですが」

「ウルちゃん、娼婦さま、ひと晩付いてくださったの」

レスイちゃんの言葉に、ノイエさんは困ったように笑った。

「巫女姫様をお守りするの、わたし共のお役目ですから。それに加えて、姉代わりとしてお側に付いていることしかできませんでしたのよ」

「いやいや。レスイちゃんも、転んだ晩にひとりで眠るのは心細かったでしょうし、何かあるかわかりませんからね。媚嬌さまが付いてくださっていたなら千人力ですよ」

わたし達が話をしている間、ノイエさんに伴われてきたふたりの巫女見習いの少女達は、静かに茶の支度を整えてくれた。

「そうそう、改めて旦那センセにご紹介させていただきますね。こちら、先程のヒノちゃんのお世話をお願いしているチセちゃんとエナちゃん。こちらの祈祷楼のお世話をお願いします。巫かんなきさまのお計らいで、しばらくこの館全体のお仕事を覚えてから、どちらの楼にお仕えるか決まることになりそうですわ」

「チセに、エナです。よろしく願いいたします。旦那さま」

「あ、ああ。そんなにご丁寧に。こちらこそどうぞよろしく」

ふたり揃ってぺこりと床に低頭したチセちゃんとエナちゃんに、深々と頭を下げたわたしの様子に、ふたりの巫女見習いの娘達は、戸惑いがちにこっそりと顔を見合わせた。

「そんなに怖がらないで。わたしもヒノちゃんと同じ、このポロチセで生まれたんだ。呼び方も旦那さまなんて畏かしこまらなくていいから

ね。ユチさんでも呼んでくれ」

「まあ、ダメですよ。旦那センセは、ただの“狼”じゃないんです。巫女姫さまやわたし達にも、とっても大切な旦那センセなんですから。チセちゃん、エナちゃん、こちらがナタウルネ・ユチさん。わたし達の身体を気遣って、いつもとても良くしてくださっている先生よ」

「お噂は伺っております。巫女姫さま方やお姐さん達も、町の薬師さまよりも旦那センセにお願いした方が、優しくて安心だって」

「い、いや。わたしは先生なんて呼ばれる程立派なことはいないから……ノイエさんも助けてくださいよ。参ったな」

少女ふたりを前に身を縮め、大汗をかきはじめたわたしを眺め、ノイエさんとレスイちゃんは楽しそうにくすくすと笑った。

「きみ達は、同じ国の出身なのかい？」

茶をすすりながら尋ねたわたしに、チセちゃんとエナちゃんは首をふった。

「いえ、同じ地方ではありませんけれど、違います」

「自分の住む村から、国境を越えて逃げ出して……途中の町で、この国の巫さまに助けていただきました。そこからは商隊の方と一緒に」

「あと一日遅かったら、今頃……どこかに売られていたんだと思います」

「え？・・・巫さまに??　そういえば、巫さまはこちらにはいらっしやらないのかい？」

いまいち合点がいかず、問い返したわたしに、ノイエさんが頷いて言葉を継いだ。

「始終出歩いてらして、ちっともこちらに落ち着いてくださらない方なんですよ。でもこうして、帰る場所を失くした子達を、わたしどものところにお預けくださるんです。どの子も皆、深く傷ついていて・・・いかにこの国が平和かを、そんなところで実感するなんて、哀しいことですわね」

「きみ達も、大変な思いをしてここまで辿り着いたんだ。この国ではきみ達も戦力のひとつだから、引き換えに過去のことを思い出せなくなるのは辛いだろうけど・・・この国の民として、伸び伸びと暮らしてほしい」

「はい・・・ありがとうございます」

ふたりの少女は、正座した膝に涙を落としながら頷いた。

こうして他国の戦火や奴隷商の手から逃れ、この国に辿り着いた者達は皆、国の調べを受けた後、この世に生を受けた時に与えられる“然り名”を操術によりその身から取り上げられる。そして耳の奥、鼓膜に決して解けない“誓言の呪”を受けた上で、新たな“然り名”を授かり、音の国の民として生涯を過ごすことになる。

少女達は、ほぼ全員がまずこのポロチセ館に預けられ、巫女の世話や店の手伝いをし、それぞれの資質を見極められた後、巫女姫の世話係や赤子の子守、娼館の下働きなどをこなしてゆく。

つまり、ポロチセ館という限られた世界の中でこの国の習慣や言

葉に馴染み、いずれ国内に散って暮らすようになるまで、ポロチセ館がこの少女達の実家となるのだ。そして少女達は、婚姻や子のない家庭に迎えられることがない限り、このポロチセ館の娼姫として過ごしていくことになる。

ポロチセ館はこの国をはじめ、数多の国に生まれた民の血を引く娘達の手で、大切に守られている、国の要所のひとつでもあった。

其ノ拾參**巫女姫達との語り

ノイエさんをはじめ、レスイちゃんと巫女姫見習いのふたりの少女に囲まれての楽しいひと時を過ごしたのだが、そんな中、わたしが先ほどこちらに向かう途中で知った環状壁の通用門を破壊した荷牽き牛の話をした際に、チセちゃんとエナちゃんから何気なく問われた疑問が、わたしに思いがけない新たな興味をもたらしてくれることとなった。

「そっいえば、この国の牛はみんな角がちゃんと生えたままですよね？ あんなに畑がたくさんあるのに、牛の角は使わないんでしょうか？」

「角？ きみ達の国では、牛の角を畑仕事の道具に使うのかい？」

「いえ、そうじゃなくて肥料作りのために使うんですけど……」

「こちらの国では、どんな使い方をされるんですか？」

不思議そうに首を傾げるチセちゃんとエナちゃんの様子に、わたしはあまり深く考えずに話し始めた。

「うん？ そうだねえ、せいぜい飾り物や角笛に加工したり……
・・後は、そ、その……まあ、その位かな？ 他に良い使い道があれば、伸びすぎた角も捨てられるばかりじゃないんだろうけどねえ」

「まあ、旦那センセ。お顔が赤いですよ？」

「いや、は……はあ。どうもすみません」

思わず身を縮めて口ごもったわたしと、クスクスと袖口で口元を覆って楽しみに笑うノイエさんに、チセちゃんとエナちゃんは顔を見合わせた。

「あなた達の国では、どんな使い方をしているの？」

ノイエさんの言葉に、エナちゃんはニコリと幼さの残る笑顔を覗かせた。

「山の雪が解け出す頃に、切り取った牛の角に牛やヤギの糞をたくさん詰めて土に二季ほど埋めておくんです。取り出す頃には匂いもなくなっていますから、それを水で薄めて畑や牧草地に撒くと、豆や麦がよく育つんですよ」

「わたしが住んでいた村長の婆さま達は、谷の洞穴から削ってきた石の粉をいくつも混ぜて、畑に撒く薬水を作ることができるんです。牛の角に詰めて土で寝かせるところは、エナの地域と同じです」

続くチセちゃんの言葉に、わたしはすっかり夢中になっていた。

「へえ、混ぜ物の石粉かあ。それは面白いなあ……ええと、今日はなにか書くものは……」

興味を引かれたわたしが、座りなおして自分の衣をゴソゴソと探り始めると、ノイエさんが部屋の隅に設えてある文箱から羊皮紙と

竹筆を取り出ししてくれた。

「はい、どうぞ」

「ああ、すみません。それで、その石の粉つてのはどんなものがあったか、わかるかい？」

わたしの質問に、チセちゃんは口ごもった。

「あの、それが……わたし達だけだと危ないから、谷には入っちゃいけないって言われていたので……いつもわたしの弟達が、荷運びのために行って行ったので、お土産に小さな欠片を貰ったことはありましたけど」

あの、これです。

そう言つて、懐から小さな布袋を取り出したチセちゃんは、袋の中身を机にあけて見せてくれた。

「まあ……これは……結晶ね？」

ノイエさんの声に、皆は机の上の小さな石塊をじつと見つめた。

「本当はもつといろんな色があつたんですけど、どんな名を持つのかまではわかりません。でも、この他にも見た目の少しずつ違う石がいくつかあつたのは憶えています」

「ふうん……これは長石の一種だね。なるほどなあ、畑には埋まつていない石で肥料が作れると……ええと……」

目の前の石を手に取り、しげしげと眺めていたわたしは、ふとノイエさんの顔を見つめた。

「今は何刻でしょうか？」

「ちょうどさつき、六つが鳴ってましたけど……もう、旦那センセったら。わたし達よりも、すっかりこの綺麗な石に夢中なんでしょう？」

「え？ あ、いや。その……今ならまだ、石屋が開いてるんじゃないかと思ったもんですから。け、決して皆さんのことを蔑ろにした訳じゃないですよ？」

既に腰を上げかけていたわたしは、笑いを堪えている女性達に囲まれ、頭を掻いて座りなおした。

「巫女姫様も朝からずっと、旦那センセにお会いできるのを楽しみになさっていらしたんですよ。ねえ？」

ノイエさんの声に、レスイちゃんは耳を赤くしてこくりと頷いた。

「ああそうだ！ レスイちゃん、ボクは肝心なことを忘れていたよ」
わたしは懐に手を入れると、我が妹から預かっていたちいさな布包みを取り出した。

「はい。ルニから、レスイちゃんに渡してって。安産のお守りだつて」

「・・・・・・・・きれい。ル二ちゃんが、作ったの？」

「うん。ホラ、ボクも着けてるからね。レスイちゃんと、ル二と、ボクの三人でお揃いだよ」

わたしは衣の袖を捲り上げ、二の腕に撒いた飾り帯をレスイちゃんに見せた。

「そうだなあ、じゃあこれも何かの縁だ。きみ達ふたりで、レスイちゃんの腕にこれを巻いてあげてくれるかい？」

「え！？ わたし達がですか？」

「あの、媚嬌様がおいですから・・・・・・・・この国に住まわせてもらえることになったばかりのわたし達なんか、とても・・・・・・・・」

恐縮し、座したまま後ずさりするチセちゃんとエナちゃんに、ノイエさんは微笑んだ。

「巫女様のお腹に宿られた御子は、この国の護り神、櫛羅様の授かり子なの。この国の民に生まれ変わったあなた達ふたりにも、これからたくさんの幸運が訪れるように、巫女様にお守りの御印を結んで差し上げてちょうだいな」

「お願い、します」

レスイちゃんはニコリと笑って、静かに自らの腕を差し出した。

「し、失礼しますー！」

一気に緊張を高めたチセちゃんとエナちゃんは、レスイちゃんを挟むように座りなおした。

チセちゃんがレスイちゃんの手を取り、静かに衣の袖を捲り上げると、編み上げの腕飾りを両の手に捧げたエナちゃんが、レスイちゃんの二の腕に腕飾りを巻いた。

「巫女様、お苦しくはございませんか？」

「大丈夫……とってもきれい」

「はい。巫女様にぴったりのお色で素敵です。こちらでお結びいたしますね」

「ひとつ目を結んだら、もう一度撒いて。ずれないように……そうそう。じゃあ、最後は旦那センセ、お願いします」

ノイエさんの声とともに、飾り帯の一巡目を結び終えたエナちゃんは、それぞれの紐の先をわたしに手渡してくれ、レスイちゃんの前から座したまま場をずれてくれた。

「じゃあ、レスイちゃんに　可愛い女の子が生まれますように」

おそらく、この授かり子は女兒だ。女兒であれば手元に置いて育てることもできるし、レスイちゃんもレスイちゃんのおばさんも、きつと喜ぶに違いない。

ボクもルニも……それからこの国の民も皆、きみの誕生を待っているからね。

飾り紐をきつくなならない様にしっかりと結び終え、衣の上からレスイちゃんのお腹に両の手を添えながら眼裏と胸の奥で感じる眩しい光の中に心の中で祈ったわたしは、静かに瞼を開いた。

「旦那センセは、この子がどちらかお分かりなんでしょう？」

「ええ。残念ながら、おそらくは。という程度でしか解らないんですけど」

ノイエさんの声に、わたしはレスイちゃんの顔を覗き込んだ。

「どうしようか？ レスイマアは、この子がどっちか今知りたいかい？」

「………うん、わたしも………待ってる」

「うん、そうだね。どっちが生まれてもいいよね。ボクもそう思うから、楽しみにしておこうね」

「うん」

腕に巻かれたルニの手製の腕飾りを、衣の上からそっと押さえたレスイちゃんは、その手で自らのお腹を優しく撫でてふわりと笑った。

「巫女姫様のお加減も大事なくて、旦那センセもご安心されましたでしょう？ そろそろ暗くなってきましたから、そろそろ夕餉のお支度に掛かりましょう。すぐに膳をお持ちしますわね」

ノイエさんは立ち上がると、チセちゃんとエナちゃんを伴って座敷から出て行った。

其ノ拾肆**巫女姫達との語らい

「ねえ、旦那センセ？ 今日こそはお泊まりくださるんでしょう？」

「そうそう、あたしたちもお城のお話、聞きたあい！！」

いつの間にか、座敷はどこからかわたしが尋ねてきたという噂を聞きつけ、挨拶がてら顔を出しに来た娼姫たちであふれかえっていた。次々に差し出される酒杯と、可愛らしい女性達に囲まれ、まんざらでもなかつたわたしは『城』という言葉が出た途端、心地よく巡っていた酒の酔いが一気に醒めるのを感じた。

「ね、ね、旦那センセはもう、黒王子様にお会いしたんですか？」

「このあいだ、わたし達、お姐さんのお使いで街に出掛けたんですけど、その時にちょうど黒王子様がいらしてらって噂が流れた途端に、街の娘達がみんないなくなっちゃって、店番の子までいなくなっちゃったんですよー！？ お店の奥にいたおじいさんは、耳が遠くて話も通じないし、困っちゃった」

「あら、じゃあそれである時、戻って来るのが遅かったのね？」

ノイエさんの言葉に、当時を思い出してうんざりしたように肩をすくめた娼姫は頷いた。

「お姐さんの書き付けをいただいていたから、それを見せたら買い物はできましたけど、店番のお嬢さんが戻るまで、店を手伝ってく

れって言われちゃって、断れなかつたんです」

「あら、でもそのおかげで、戻ってきたお嬢さんから黒王子様の話が聞けたんでしょう？ 随分浮かれちゃっていたのは、どちらさまでしたっけ？」

笑ってからかう同僚の声に、娼姫は大きく頷いた。

「そりゃ当然よ！ 手伝いまでして、何も御礼がないなんて、あり得ないでしょ！！ どうせなら王子様を連れてきてくれるお釣りがきたっていいくらいよ？」

「あら、やだ。それじゃ手伝いよりも、お釣りの方が高いじゃない？」

ワツと笑い声をあげた娼姫達は、笑いを収めると一斉にわたしを見つめた。

「お城のお話、聞かせてください！！」

一斉に可愛らしい娼姫達のキラキラとした眼差しに見つめられ、わたしは城での自分の身分を思い、思わず口籠もった。

「いやあ、実はわたしは城の書庫で仕事をしているから、王子殿下にはお会いしたことがないんだ。しかも見習いだから、殿下にお目に掛かれる機会なんて、よほどのことがない限りは、ないんじゃないかなあ？」

「あら、じゃあ旦那センセは、ずっとおひとりでお仕事をされておいでなんですか？ 寂しくありません？」

互いに顔を見合わせて頷く娼姫達に、わたしは手を振って笑ってみせた。

「いや、そんなことはないよ。時々クオル尉官や巫様もおいになるからね」

「わ、すごい。旦那センセ、クオル尉官様って、お仕事に関してはものすごく切れ者というか、とにかく部下に無理難題を押し付ける厳しい方だってお聞きしましたけど……怖くありませんか？」

「はは。クオル尉官はそんな御方じゃないよ。いったい誰がそんな失礼なことを言ったんだい？」

笑いながらのんきに尋ねるわたしの背後で、楽しげな声が出た。

「わたしデース」

引き戸が開き、現れたのはこの国の巫を務められるミルフ老師の姿だった。

「おやおや、どこかで聞いた声だと思えば、ナタネくんじゃないの？ これはまた賑やかデスねえ。楽しい宴は大好きデス。わたしも混ぜてください」

予測していなかった突然の出没に腰を抜かしそうになったわたしを前に、巫様は涼しい顔でスタスタと座敷の中に入って来た。

「そういえばきみは、このポロチセで生まれたそうデスねえ？」

「は、はい……！ うわっ！？ 巫様、どうぞこちらにお座りを！ 申し訳ありません！！」

慌てて上座から立ち上がるうとしたわたしを、巫様は面倒くさそうに手をひらひらと振って制した。

「ああ、いいのいいの。わたしはネ、こっちの狭い場所で、可愛い娘ちゃん達に囲まれている方がいいんです」

「で、ですが……」

よいシヨ。と、座敷内にひしめく娼姫達の間座り込んだ途端、ひとりの娼姫が声をあげた。

「きゃっ！ ミルフちゃんたら今、お尻触ったでしょー！？」

「もー！ 油断も隙もないんだから。いくら巫様でも、これ以上は娼姫として、しっかりお代を頂戴しますからねー？？」

「あんまり悪戯ばかりしていると、櫛羅様に叱られちゃうんだから！」

「きみ達のこと櫛羅に叱られるなら、わたしは巫として本望です」

娼姫達に文句を言われながら、巫様は楽しそうに娼姫達の手を握った。

「いつ来てもここは良い。女性は皆、こうして賑やかに笑っている

のが一番デス。我が国の城はどこを見ても男ばかりで、ちっとも楽しくありませんから、このポロチセこそが、わたしにとっては大切な城のようなものデス」

「お城に女性ばかりがいたら巫様がお仕事にならないと、皆様ご存じなのでしょう？ 巫様のおためを思われた、王帝陛下と王子殿下の賢明なご選択でございますわね」

「ふふん……まあ、いずれあの男も、そうは言っていられなくなるんじゃないデスカねえ？ いったいどうするつもりなのやら……」

ノイエさんの言葉を受け、チラリと楽しげな笑みを浮かべた巫様は、なみなみとさしつがれた酒を、旨そうに煽った。

「ところでナタネくん。尉官から、例の話は聞きましたか？」

「あ　は、はい。しかし、本当にわたしが担わせていただいても良いものなのかと……お受けしたものの、これといった実績もありませんし、自信がないのです」

「ふーん……自信ねえ」

巫様は、酒杯の中身をゆらゆらと揺らしながら何事かを考えていたが、やがてわたしの顔をじっと見つめられた。

「とりあえず、まずはきみのことからでも、始めてみたらどうデスカ？」

「わたし自身のこと……ですか？」

「そう。ものごとの入口なんてものはネ、どんな切っ掛けでも良いんですヨ。きみ自身のことだって、この国で起きた事実の一部には違いありませんからネ」

「ミルフちゃん？ 旦那センセは、なんのお仕事をされるんですか？」

ひとりの娼姫の言葉に、巫様は楽しそうに笑った。

「それはもちろん、わたしの部下とくれば女性の口説き方の特訓です」

「えー！？ 旦那センセが??」

その場にいた娼姫達は、一斉に顔を見合わせて笑い出した。

「ダメよー。いつもわたし達からだって、必死に逃げ回ってるのにー！！」

「ね？ それなら、わたし達が旦那センセを特訓してあげましょうよ。女手なら売るほどあるもの」

「じゃあ、とりあえず旦那センセ、今晚は三人以上はお相手してくださいね？」

「えー！？ い、いや……今日はずいぶん酒も飲んでるし、それに明日は仕事があるから」

「だーいじょうぶ、わたし達が腕によりをかけてお世話申し上げますま

すから。うふふ……旦那センセと共寝できるなんて、滅多にないもの。嬉しい」

きつと商売上の言葉に違いないのだが、それでもつい嬉しいと思えてしまう罪つくりな言葉を、わたしの耳元でささやいた娼姫は、巫様を振り返った。

「ね？ ミルフちゃん、大事なお役目のために旦那センセをお借りしても良いでしょうか？」

妙な方向に転がり始めた話に動揺しているわたしに、巫様は面白いような笑みを浮かべた。

「そうデスねえ。職務上、喜ばしいことではありませんが……
・わたしも無料なことはしたくありませんから、明日は午後から登城しなさいヨ。上司のわたしが許可します。ゆっくり楽しんでくださいね」

「は……?」

「きゃー!!! やったー!!! さ、旦那センセ、行きましょう??
ルニちゃんにはお使いを出しておきますから、ご心配なさらないでくださいね?」

あれよあれよという間に娼姫達に取り巻かれたわたしは、楽しげに手を振って見送る巫様と、困ったように笑うノイエさんや娼姫達を座敷に残したまま、群がる柔らかな手に引き摺られ、身体を押されながら宿屋棟の閨へと連れ去られたのだった。

其ノ拾伍**草原に生きること

子どもの頃から、よく転んでいた。

父母は、わたしの身が七還暦生まれということもあり、運良く残された視力が他の者と比べ、多少弱いこと自体は承知していたが、家の中の生活そのものには支障がなかったため、もともと妹に比べ、のんきでぼんやりしたわたしの性格の所以ゆえんだろうと、当初はあまり気に掛けていなかったようだ。

ところが、友達と遊びに出かけては、ほぼ毎日といって良い程、衣を引つ掛けてはかぎ裂きにし、手足を擦りむいては友達に連れられて帰ってくるわたしの様子に、どこかおかしいと 当初よりも格段に視力が落ちていたために、道に出張った小石や段差がわからず、転んでいるのだと 気づいてからは、わたしに妹を必ず一緒に連れて行くようにと言うようになった。

もちろん、ル二のことは可愛い妹と思っではいたが、同世代の友達同士で遊ぶ中に幼い妹を連れて行くのは、正直あまり気が進まなかった。家の中で人形遊びをするのが好きだった内気な妹は、わたしとほぼ同じ歳の子ども達にひとりだけ混ざって遊ぶことを最初は嫌がり、母に駄々を捏ねていたが、何度か一緒に遊びに出るうちに自分からわたしの手を引いて歩くようになり、階段や石ころの多い道では、妹の肩に手を置いて歩くようにと、わたしに命令までするようになっていった 思えば、この頃から既に、わたしが妹の尻に敷かれる生活が始まっていたのかも知れない。

通常、七還暦生まれの子どもは、早ければ生後一年の間 どんなに遅くとも七歳を迎える前に、将来失う感覚に衰えが出てくるの

だが、わたしの場合は八歳の頃、もうすぐ九つの誕生日を迎えようかという頃に、その徴候は現れた。わたしにわずかながらも視力が残されたのは、もしかすると、この盲の徴候の遅れがもたらした幸運だったのかも知れない。

当時、わたしたち家族は、田畑を耕すことを生業とする者が多く住まう、第一環状区で暮らしていた。

田畑を耕し、土を休ませる何遺暦かの際に、都を取り囲む広大な草原を遊牧しながら生活の糧を得る多くの民と同様に、父母は羊飼いを生業とし、時には隣国への荷運びの手伝いをしながら、一家の生計を立てていた。

ある時、父はわたしに仔ヤギと仔ヒツジを十頭ずつくれた。

「ウル、これはおまえのものだ。全て自分で面倒を見てごらん」

八歳ともなれば、子どもが親について放牧の仕事に出るのは特に珍しいことでもなかったが、自分だけのヤギやヒツジを得られるのは、一人前の立派な働きができる成年になってからというのが、遊牧民の習わしだ。

常日頃から、習わしを厳格なまでに重んじていた父が取った行動は、周囲の者達を一様に驚かせた。

当時、わたしの家族の大切な財産であったヒツジは百三十頭、ヤギは三十頭。この中からそれぞれ十頭ずつを、一人前にはまだまだ年端のいかないわたしに分け与えるとは、家族にとっても大きな負担だったに違いない。だが、父も母もそのことには何も触れず、いつも通り雨季を過ぎると、妹とわたしを連れて音の国の都を出た。

馬を駆り、羊を追って広い草原を移動する日々の中、都は少しず

つ遠くなっていく。この国の馬は異国のそれとは違い、身体も小柄で体軀がしっかりと安定していたため、ちいさな子どもでも乗りやすく、御しやすい。

馬の首にゆるりと渡した引き綱一本を頼りに、裸馬に乗って草原を渡る風に吹かれるのは、とても気分の良いものだった。

遊牧中は通常、草原に放たれた動物達の後を追いつながら面倒を見るものだが、父は手始めに、わたしの仔ヤギと仔ヒツジのために専用のトシカまで作ってくれ、その中で飼いなさいと言ってくれた。

物の配置を頼りに、ぼんやりとした視界の中で可愛い声をあげて動き回る黄土色や灰色の塊のために、わたしは草原に出る両親の傍らで草を刈り、自分で荷車を引いてはトシカにいる仔ヤギと仔ヒツジに運んだ。

時には血が出るほど強く手を噛まれたり、ものに躓いて転んだ上から踏みつけられたりもしたが、遠くからわたしの足音を聞きつけては甘えて柵に近寄ってくる仔ヤギや仔ヒツジとの暮らしは、わたしにとって非常に面白いものであり、手のひらで感じる動物達の温かさや毛の感触に、幼いながらも草原の民として生まれた誇りを感じていた。

ある日、両親が友人の結婚祝いに呼ばれ、少し離れた遊牧の一団のところに掛けて行った。

当時、わたしの家族を含めた二十ほどの家族がその近辺で遊牧を行っており、家畜を奪いにやってくる賊も手を出しにくい状況にあった。雲の流れから、夜には雨が降りそうだったため、祝いの宴を昼間に行うことになり、わたしは妹とふたりきりで、留守番をすることになった。

「いい？ 夕方までには戻ってくるけど、なにか困ったことがあったら、すぐにルニを超越しなさい。ルニ、あの青い旗が目印だから

ね？ いい？」

「うん」

遠く微かに見える青色の旗印の立つ家を示した両親は、馬に乗って出掛けて行き、家にふたり残り残ったわたし達は家事分担を相談して、ルニが洗濯物を洗って干すあいだ、わたしは父のヤギのもとに乳搾りに行くことになった。

わたしが不自由なく乳を搾れるように、いつもなら放してあるヤギが二頭、囲いの中で杭に繋がれていた。

その日、父の持つ動物達は知り合いに預けられ、遠い牧草地まで出掛けていて、普段父が動物達を放っている囲いの中は、二匹のヤギ以外はなにもおらず、ひっそりとしていた。

ボクの動物も、この中なら放しても大丈夫なんじゃないかな？

117

いつも薄暗く、狭い上に、大空の見えないトシカの中で暮らしている自分の仔ヤギや仔ヒツジに、たまには青々とした草を思い切り食べさせてあげたかった。囲いの中なら、ルニとふたりで面倒をみることができるかも知れない。

そう考えたわたしはルニを呼びに行き、ふたりでわたしの仔ヤギと仔ヒツジを、トシカから囲いの中に移動させることにした。

「あ、お兄ちゃん！」

仔ヤギと仔ヒツジを半分程、囲いの中に移動させた時だった。突然、一頭の仔ヤギが柵を跳び越え、野に出てしまったのだ。

ルニは捕まえていた移動中の仔ヒツジの綱を手放すと、大慌てで仔ヤギを追って走り出した。

後に残されたわたしは、一度に四頭の仔ヒツジを前に右往左往し

ながら、なんとか囲いの中にヒツジを移動させることに成功した。

「はあ………はあ………」

汗びつしよりになり、囲いの中で草地に散る仔ヤギ達を眺めながら、閉じた柵にもたれかかっていたわたしのところに、ルニが泣きながら戻って来た。

「お兄ちゃんのヤギが、川の中に入っちゃったの」

当時、決して子どもだけで川には近づいてはいけないと、両親から厳しく言われていた。川は動物達の水場であり、家畜を狙う狼達の狩り場でもあったからだ。腹を空かせた狼達は集団で人間を襲うことがある。ついこの間も、内蔵を食い荒らされた子どもの死体が川の付近で見つかったばかりだった。特に、この時期は野に食べ物が少なく、狼達もやせ衰えている。ルニは危険を冒して仔ヤギを追って川まで近づき、仔ヤギが手の届かないところに入ってしまったから諦めて戻って来たのだ。

………ウ、オオオー……ウ………。

わたしとルニは驚いて縮み上がった。今までこんなに近くで狼の遠吠えを聞いたことがなかったからだ。遠吠えはここからそう遠くはない川の方角から聞こえてきていた。

先の遠吠えに呼応するかのようには、何度も狼達が呼び合う声が響く。

あの逃げ出した仔ヤギを見つけたのかも知れない。もっと多くの餌を捜しにここに来て、わたしの仔ヤギと仔ヒツジを見つけてるかも知れない。それでも、お腹がいっぱいにならなかつたら　！？

わたしとルニは恐怖のあまり大声で泣きながら、必死に囲いの中の仔ヤギと仔ヒツジをトシカの中に追い込んで扉に錠前を下ろし、隅にうずくまって布団をかぶり、ガタガタと震えていた。

どのくらいの時間が経っただろうか？ 馬を御する鋭い口笛の音と、わたしの父を呼ぶ声が遠くから聞こえてきた。

「アロだ！！」

わたしは叫んで、布団をはねのけた。

“アロ”とは、この国で、自分よりも年上の若者を意味する言葉だ。やがて馬の嘶きとともに足音が近づいてきて、扉を叩く音がした。

「ナタリノ！！ いますか！？」

ルニが扉に駆け寄り錠前を開けた途端、扉の向こうに近隣で遊牧をしている一家の若者が立っているのが見えた。

「ルニ！！ お父さんは！？」

「今、マアと一緒に結婚式に行っちゃったの」

「だったら、ウルはいるか！？ おい、ウル！！ おまえのヤギが狼にやられた！！ 今、人手を集めて狼を追っているから、おまえも来い！！ ルニは絶対に家から出るな！ わかったな！？」

「でも、お兄ちゃんは目が……！！」

「そんなこと関係あるか！ 襲われたのはウルの家畜なんだぞ！」

怒鳴りつけるアロの声にわたしは慌てて扉から飛び出し、アロの後を追った。

草原は鈍色の赤に染まり、遠くから微かに大勢の人々が狼を追う声が聞こえてくる。何度か顔を合わせた程度のその若者は、わたしを軽々と馬に乗せると自分も背後に跨り、勢いよく馬の腹を蹴った。

「泣くな！！」

草原を駆け抜ける馬のあまりの速さに縮み上がり、ことの重大さに嗚咽を漏らしながら涙を零しているわたしに、アロの檄げきが飛んだ。

馬は飛ぶような勢いで川の浅瀬を突っ切って渡り、森の中へと入っていった。アロが馬の駆け足の勢いを落とすと、やがて木々の間に男が数人集まっている場所に近づき、馬を止めた。

「ウル。おまえの仔ヤギで間違いないか？ ちゃんと近づいて見ろ」

「……………う……………っ！」

そこには不自然な角度に首がねじ曲がり、剥き出しのはらわたを無残に曝したちいさな動物が転がっていた。肉という肉は全て噛みちぎられ、鋭い牙でこそげ取られて、ちいさく細い骨が剥き出しのまま血を噴き出している。体毛は赤く染まり、唯一白いまま残されていた脚先は、空を蹴るようなかたちで強張っていた。

「どうなんだ？」

「……………ボクの、仔ヤギ……………だと思う」

暗くなつた森の中で、息絶えた白い仔ヤギの足先だけが周囲から浮き立つように白く滲んでいる。目に溜まつた涙でそれ以上凝視することができず、わたしは身体を震わせながら、ただその場に立ち尽くすことしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7350j/>

見習い書記官ナタネの音之國記

2010年12月31日11時33分発行